
真・恋姫＋無双～その男、独眼龍～

光闇雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜その男、独眼龍〜

【Nコード】

N6900Q

【作者名】

光閻雪

【あらすじ】

目の障害をもって生まれた青年は二十歳の誕生日の前日に父親から家に伝わる宝刀『白狐』を受け継げと言われ、どうするか考えている内に眠ってしまった。二十歳の誕生日に目が覚めたとき、青年は

その男、独眼龍〜1〜（前書き）

真・恋姫十無双をやつてたら描きたくなつたため、三作品目を連載しちゃいましたゝ

その男、独眼龍くっ

「親父は何の用だろう？」

昨日のことだ。親父から連絡があり、実家に戻ってきてくれと言われた。まあ、暇だったから良かったけどね。明日は私の二十歳の誕生日で、いつもは誕生日会を開いてドンチャン騒ぎをするのだが、生憎と皆用事があるとかで明日の誕生日会は中止と相成ったわけだ。さて、親父の用って何だろう

【ピン、ポーン】

「はいはい、今出ますよ（ガラガラ） あら？ 坊ちゃん、お帰りなさいませ」

「ああ。清さん、元気かい？」

「ええ、元気だけ取り柄ですからねえ」

実家のチャイムを鳴らすと出てきたのは、家政婦の氷上清美さん。
私の生まれる前から 四十年近く勤めてくれている人だ

「親父はいるかい？」

「今ですと。道場で剣術指南をしていらっしやいますよ」

「そう。じゃ、行ってみるよ」

「はい、いつてらっしゃいませ」

清さんにそう告げると道場の方に向かった

私の家は代々、剣術道場を開いていて親父はその九代目の師範だ。

ん？ 私はならないし、なる気もないよ。私には三つ上の兄貴で師範代がいるのだから

「おい、親父。来たよ」

「ん？ おお、まさなり政也か。ちょっと待ってくれ。よし、打ち方やめ！ 休憩に入りなさい」

「「「「はい！」「」「」「」

親父の号令で門下生の子ども達が、休憩に入る。それを見届けた親父は私の方に近づき

「・・・・・・・・政也、渡したいものがある」

と言って、私の正面に座った。渡したいものってなんだろう・・・
・・・？

「……お前には、色々な事を教えてきたつもりだ。 刀を扱う時の心構えとかな」

「あ、うん」

「明日はお前の二十歳の誕生日だな。 明日からお前は成人として扱われる。 つまり、昔の元服。 そこで俺は、父から授かったものをお前に託したいと思う」

「そ、それって……」

「ああ。 我が家に伝わる宝刀・白狐^{じゆつ}だ」

親父が差し出したのは、我が家に伝わる宝刀・白狐だった

この刀は、私のご先祖様である初代・龍政宗^{りゆうせいむね}が鍛え上げた代物だ。生涯を賭して鍛え上げられたこの刀は何人もの人を切っても刃毀れせず、血を吸っても錆を起こさなかったと伝えられている。 本当の事は分からないが、その神聖な刀を私に授けるとするのはどういふわけなのだろうか……

「親父、質問いいかい？」

「何だ？」

「何故、私に……？ それに兄貴は何と言ってるの？」

「そのことか……まず、お前の兄・政孝^{まさたか}だが、お前にその刀を授けて欲しいと言っている」

「兄貴が……？」

「ああ」

兄貴が私に白狐を授けてほしいと言っていた……？ 何故……？
兄はこの刀を授かるのが夢だったのではないのか……？

「……お前が疑問に思うのも分かる。 政孝はこの刀を授かるために頑張ってきたのだからな。 だが、政孝は知ったのだよ。自分にはこの白狐を扱えるだけの器量がないとな……」

「器量……？ 私にはそれがあると……？」

「ああ。 政孝は いや、私もだな。 お前ならこの白狐を十全に使いこなせるようにすると信じている」

「何故……？」

私は兄貴とは違い、刀には興味がなかった。 でも剣術は好きだったから、親父が受け継いだ狐龍剣術^{こりゅうけんじゅつ}を学んでいた。 今では、親父や兄貴よりも凌駕していると言われるが、私はそうは思っていない。 その人間に何故、白狐を扱っただけの器量があるのだろうか、

いやないのではないだろうか………？

「…………お前の左目だ……………」

「私の左目？」

咄嗟に左目についている眼帯を触る。私の左目は生まれつき視力がなく、光に触れると目が腫れるため、眼帯をしているのだ。で、その左目がどうしたと言っただ？

「お前には言っていなかったが、父が生きていた時、言っていたことがあった……………」

「お爺ちゃんが……………」

「ああ」

親父は姿勢を正すと私を見据えてポツポツと話をしてくれた

長く話されたが、要約すると私は初代・龍政宗と瓜二つらしい。

政宗もまた左目が生まれつき視力がなかったが、武士の家系に生まれた政宗もまた、兄達と同じように剣術を学び、兄をも凌駕するほどの剣術家にまで成長したらしい

それと、私が似ている？ そんなバカな……………そんなわけがない……………私はまだ剣術家としては半人前だと自負している

のだから

「……………そして、決定的なことはこの白狐がお前を選んだと言っことだ」

「白狐が私を選んだ……………?」

「そうだ。政也、十五歳の誕生日のことを覚えてるか?」

「十五歳の誕生日……………」

十五歳の誕生日、五年前の明日か……………

「代々の習わしで私からお前に白狐を渡したことがあっただろう?」

「あ、ああ」

十五歳の誕生日、親父から私へ白狐を渡すという恒例行事が行われた。これは龍家一族の習わしで十五歳（昔の元服の年）の誕生日に本家・分家、男女問わず、現白狐所有者からその人物に渡されるというものがあり、その一日は白狐を所有することが許されるのである。兄貴の時は、寝てたから知らないが、あんまり違うことをした覚えはないけど……………

「その時、私 いや、一族全員が驚いた。もちろん、政孝もだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あの時、私は何をしたんだっけ？ ああ、そう言えば白狐を鞘から抜いたんだっけ・・・・・・・・

「お前はこの白狐を鞘から抜いたな？」

「ああ。 でも、それがどうしたの？」

「この鞘には特別な細工がしてあってな」

親父が言うには、白狐が収められている鞘には親父が後継者と認め
た者にしか抜くことができない細工が施されていたらしい。 しか
し、当時の親父は誰も後継者を決めていなかった。 だから、私が
鞘から抜いたから、驚いたと、でも・・・・・・・・

「それはおかしくないかな？ だって、私は確かにこうやって鞘か
ら抜いたんだから」

「ああ。 私はお前が寝た後、父に問うた『どういうことでしょう
か？』と・・・・・・・・」

「うんうん」

「・・・・・・・・その時、父はこう言われた。 『お前には、ワシが

死ぬ時に言うつもりであつた。しかし、まさか政也が抜くとは思わなんだ。これは父・お前の祖父が死ぬ前にワシに伝えたことだが、白狐は人を選ぶ。その白狐が認めた者はたとえ現所有者が後継者と認めていない者でも鞘が抜かれるとな』」

「え？ それって・・・・・・・・・・」

「ああ、お前は白狐に選ばれたんだ。だから、政孝も『自分が抜けなかった鞘をいとも簡単に抜くとは・・・・・・・・・・やっぱり、俺より政也の方が才能があつたんだ。親父、この白狐・・・・・・・・俺が二十歳になったら渡すってことになってただろう？ それを俺じゃなくってさ、政也に渡してやってくれ』と言って白狐の所持を辞退したんだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

親父の言葉を聞いて、言葉が出なかった。兄貴は私が剣術を習い始めた七歳の時から、いつも言っていた。『俺は必ず白狐を受け継いでみせる』と・・・・・・・・その兄貴が、私に白狐を譲ったということが未だに信じられなかったからだ

「・・・・・・・・兄貴はそれで納得してるのか・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・政孝は納得している。今までの政孝は白狐を受け継ぐことだけを考えて鍛錬していた。それが悪いとは言わない。

だが、それに固執するあまり私の言う通りにしか鍛錬をしてこなかったのも事実だ。しかし、白狐という呪縛から解き放たれた政孝は、今では私の言う通りではなく、自分の考えで鍛錬をしている。

それが何よりも私は嬉しいのだよ」

「親父、私は……………」

この白狐を受け取るということは、親父の後継ぎになると言うことだ。でも、私はなる気はないし、親父も兄貴を後継ぎにしようと考えているだろう。でも、親戚達がどういうか……………」

「いや、今受け取るか受け取らないかの結論を出せとは言わない。それに、白狐を受け継いだ者を後継ぎにするとは考えていない。私の後継ぎは政孝しかないのだからな」

「……………それは分かってるよ」

「そうか。それと親戚どものことは考えなくて良ろしい。そこは私が何とかする。だから、考えてほしい、受け取るのか受け取らないのかをな。今日は泊ってゆっくり考えなさい」

「……………分かった」

「うむ。では稽古を始めるぞ！」

「……………はい！」「……………」

親父は白狐を私に渡すと、稽古に戻っていった。明日は二十歳の誕生日……………それまでに考えないといけないな。白狐を受け継ぐか、受け継がないのかを……………」

私は白狐を見つめながら、どうするか考えていった

「・・・・・・・・ん？・・・・・・・・」

どうやら、白狐について考えているうちに寝てしまったみたいだ

「え？」

ゆっくりと起きあがった時、思わず驚いてしまった。何故なら、私が立っているところが何も無い荒野の真ん中だったからだ。なんだこれ？ 実家の俺の部屋で寝たはずだよな・・・・・・・・それが何故、外で・・・・・・・・

「これは夢・・・・・・・・ではないな」

私は長年の鍛錬の賜物で夢と現実を把握することができるようになった。まあ、いわゆる勘なんだが。で、その勘ではこれは現実だと知らせている。うゝむ、これは面妖な……………」

「ん？ この服は高校の時の制服……………」

ふと服装を見ると、何故か高校の時に着ていた制服だった

「おい、嬢ちゃん！ いい服を着てるじゃないか」

「なんだな」

「兄貴、こいつ良いとこの嬢ちゃんか何かじゃないですか？」

突然、声をかけられたので振り返った次の瞬間、そこには衝撃の光景が映った。小汚い服を着て山賊の服装をした人物が三人立っていたからだ

えっと、この服装は……………中国の三国時代ぐらいの服装かな……………？ まあ、それはさておき……………」

「えっと、あなた達は……………」

「おつ　なかなか、別嬪じゃないか」

「そうなんだな。　　が、眼帯も似合っているんだな」

「兄貴、こいつに酒でもついでもらいましょーよ」

「おお、良いね」

三人は私の顔を見て何やら邪な考えをしている様子である。　え？
何でお嬢ちゃんと言われて驚かないのかって？　ああ、言われ慣れているからね……………

私の容姿を説明すると、よく友人から女性が男装しているみたいね
って言われるほど女顔で、髪をポニーテールにしている。　髪を切る暇がなかったため、下ろすと腰まで届く長さにまで伸びてしまった

14

「……………それにしても何で男装なんかしてるんでしょうね？」

「それは俺が分かるわけないだろ！」

「そ、そんなに怒鳴らないでくださいよ」

「ど、怒鳴るのは良くないんだな」

「うるさい！　お前達はいつも　　（クドクド）」

私が考え事をしていると三人はケンカを始めていた

えつと、これは止めるべきか．．．．それとも追剥みたいだから逃げるべきか．．．．うゝん、どうしよう

「兄貴、今はこっちす、こっち」

あ、考えてるうちに逃げられなくなったみたいだ

「あ、ああ、そうだったな。　じゃ、嬢ちゃん、死にたくなかったら俺達についてくるんだ」

「そ、そうなんだな。　大人しくしていると痛くしないんだな」

「むしろ、違う意味で痛くしちゃうかもな」

「．．．．．」

完全に女と勘違いしてるなあ．．．．今更、男だって言えないし．．．．．どうしようかな？

「おい、デブ。　嬢ちゃんを縄で縛りな」

「分かったんだな。　お、大人しくしてるんだな」

「．．．．．」

「うへへ、こいつ。 恐ろしくて声も出ないようっすね」

いや、声は出せるんだけど、どうやってここから逃げ出すか考えていたらデブさんに掴まれてしまっただけだ

『政也、我を使え』

縛られていると突然、頭の中で誰かの声が響いた

『政也、我を使え。 我は白狐。 我は政也を守りたい。 政也、我を使え』

白狐………？ あっ！ こ、この声は聞き覚えがあるぞ。
確か、あれは剣術を始めてから一週間後辺りで見た夢の声にそっくりだ。 あの声は白狐だったのか………

ふっ。 分かったよ、白狐。 お前を使ってやる。 だから、私の力になってくれ

『分かった。 我が名は白狐。 我、政也の守り刀なり！』

【ザシュツ、ポロ】

「「「!?!?!」」」

「やれやれ、派手な登場だね、白狐（苦笑）」

どこからか、飛んできた白狐が縄を切り裂くと、その状況に盗賊さん達が驚いてしまった

「でも、ありがとう」

『良い、我は政也の守り刀。 政也を守るのは当たり前』

「ははは、頼もしいなあ。 じゃ、行くよ、白狐」

私が白狐を持つと、刀身が光り出した。そして、光が収まるとそこには

「ほう・・・・・・・・まさしく、白狐だな」

刀身は白く輝き、まるで狐の尻尾のような波紋があった

「く・・・・・・・・っ!? 逃げるぞ!」

「わ、分かったんだな!」

「お、おい兄貴、デブ。待ってくれっ！」

その刀を見た瞬間、盗賊さん達は何もせずに出てしまった・・・
・なんか、呆気ないなあ。まあ、良いや。えっと、鞘は・・・
・

「ん？ いつの間にか鞘が腰に差してあったよ・・・ま
あ、良いか。白狐、これからもよろしくね」

『よろしく』

白狐にそう言つと、鞘に収める

「そこの人達は僕に何か用かな？」

「「「!?」「」」

そして、後ろを振り向きながらそう告げると、そこには三人の少女
達が驚いた表情で立っていた

その男、独眼龍くっ（後書き）

感想、質問は随時、受け付けております

その男、独眼龍くさくさ（前書き）

第二話、更新しました

楽しんでくれたら嬉しいです

では、本編をどうぞ

その男、独眼龍くさ

「何か用ですか？」

もう一度尋ねると、少し切れ目で後ろ髪を宙に浮いているように結んである女性が我に返り

「い、いや。お手を助けようとしたら、腰に差している刀が飛んできたのが見えたので」

「様子を見てみようとなったのですよ」

「風、星の言葉をとるものではないですよ」

その女性の言葉を遮って、人形を頭に乘せて少しおっとりした少女が喋りだす。そして、眼鏡でキリツとした少女が呆れて眼鏡の位置を直しながら注意していた

「あの」

「あ、すいません。話の途中でしたね。私たちは流れ星が降ったので、疑問に思ってきてみたのです。すると、貴女が賊に襲われてるのに出くわしまして、星殿が助けようとしたのです」

眼鏡少女が顔をこっちに向けて、説明しながら私を眺めていく。
他の二人も同じように私の姿を見ているようだ。それにしても流れ星とは・・・・・・・・？ まあ、私には関係ないかな

「その時、貴女が腰に差してある剣が飛んできたため、少し様子見をしようとした次第です」

「そうだったんですか。 あ、申し遅れましたね。 私の名前は龍^{りゅう}政也^{うまさなり}と申します」

「ほう、珍しい名前ですな。 姓が龍、字が政也ですかな？」

やはり、昔の中国みたいだ。 日本では字という概念はあんまりないし・・・・・・・・それはそうと

「少し違います。 姓が龍、名が政也で字はありません」

「そうなのですか？ 字がないとは珍しい。 おっと、私も名乗らなければなりませんまい。 私は趙雲と申す」

「風は程立と言います」

「私は戯志才と申します」

戯志才は偽名かな・・・・・・・・？ まあ、偽名を使うのは分かるから良いとして、他の二人の趙雲と程立って、確か両方とも男だった

はず……でも、嘘は言っていない。所謂、並行世界パラレルワールドということだろう

「しかし、娘一人で旅とは、なかなか危ない行為ですね。たとえば、腕に覚えがあったとしてもです」

戯志才さんが心配して言ってくれた言葉に苦笑してしまう

「戯志才さん、一つ良いですか？」

「何でしょう？」

「私は男です」

「……!?」「」

私が男であると言うと、戯志才さんだけではなく、他の二人も驚いたような表情になってしまった。こういうことは慣れているとはいえ、結構凹むんだよねあ

「そう言えば程立さん、さっきからF 他の呼び方をされているようですが」

『風』と呼びそうになった時、勘で言うてはならないと思ったため、

言葉を変えて訪ねた。すると、驚いていた程立さんは笑顔になって

「それは真名なのですよ。それと程立で良いですよ。お姉さんは年上ですから」

と言ってきた。いや、私は男ですって……まあ、良いや。で、真名か……

「真名って何でしょうか……？」

「真名を知らないのですか？」

「ええ」

「真名を知らないとは……」

「お姉さん、真名とはですね」

戯志才さんは信じられないと言った表情をして黙ってしまったため、程立が代わりに説明をしてくれた

真名とは、この時代の人達にとって神聖な名前で、その名前を呼べるのは心を許した者だけであり、それ以外の人がその名前を呼べば殺されても仕方がないらしい

よ、良かった。呼ばなくて本当に良かった。だって、呼んだら

最後、趙雲さんに殺されてたからね

「星殿、風。　どうやら、官軍の軍がこちらに来るようです。　早めに行きましょう」

そう言っ指差した先の荒野の向こうから、かなりの数の人間が来るのが見えた。　あれは、軍隊かな・・・・・・？

「そうだな。　それでは龍殿、御達者で」

「お姉さん、それじゃまた逢う日まで」

「龍殿、御達者で」

三者三様の笑顔でそう言っ、その場からまるで逃げるかのように軍隊とは逆の方向へ走っっってしまった

「行っっちゃったよ・・・・・・」

もう少しこっちの情報を聞き出したかったんだけど、そんな我が儘は言ってられないか。　でも、一つだけ言いたい事がある。　程立、私は男だよ

「さて、私はどうしようかなあ」

三人が去った後、私がトボトボと歩きながら考えていると、後ろの方から馬の足音が聞こえてきたと思ったら

「その変な格好をした女、待て!!」

と、女性の怒鳴り声が聞こえてきた。変な格好をした女って、私のことかな？ た、確かに二十歳の人間が高校時代の制服をきているという時点でおかしいかもしれないね。え？ その関係ない？

「あ、姉者。そのような言い方をしては………すまぬ、そのお方。少し待っていただけぬか？」

あ、変な方向に考えがいったから止まるの忘れてた。立ち止まって振り返ると、そこにいたのは黒髪と青髪の女性達だった

「この辺りに流れ星が落ちてこなかったかしら？」

二人に囲まれていると、少し遅れてやってきた金髪でツインの髪をクルクルにした少女が話し掛けてきた。 雰囲気からするとこの軍の責任者の人かな………？

「どうしたの？ こちらの問いに答えてくれないかしら？」

「あ、はい。 えっと、流れ星ですか？ いいえ、気がつきませんでしたね。 それに気がいたらここにいたので………」

「ここにいた？ 貴女は何を言ってるの？」

金髪さんはこんな荒野の真ん中にいるはずがない、と思ってるのか信じられないといった表情をしている。 どうでも良いが、『あなた』というニュアンスが女性になってる気がするなあ。 一応、男性物を着てるはずなのに………

「まあ、良いわ。 私は曹孟徳よ。 で、貴女の名は？」

「曹孟徳………もしかして、魏の曹操………？」

名前を聞いた私は、思わずそう呟いてしまう。 えっと、この金髪

さんが曹操ということは、この世界の有名処の人物は皆女性なのかな？

「なっ！？ いきなり華琳さまの名を！？ 貴様！！」

「待て姉者。 しかし、何故貴女は華琳さまの名を知っている？」

黒髪さんが大剣で私に斬り掛かろうとする。 咄嗟に白刃取りの体勢をとるが、青髪さんに黒髪さんは止められたので私も姿勢を正すでも、確かに青髪さんの言うことは一理ある。 名乗ってないはずの名前を呟いてしまったんだから、警戒されるのは当たり前だ

金髪さん 曹操さんは特に驚いた様子はなく、逆に私を品定めするかのようには眺めているけど

「華琳さま？」

「貴様、華琳さまに何をした！！」

そんな曹操さんの様子を見て黒髪さんがまた大剣で斬り掛かってきた。 というか、何もしてないし。 はあ、こうなるなら呟かなければ良かったなあ

私はそう思いながら対抗しようと白狐の柄を握る

「待ちなさい、春蘭」

「華琳さま!？」

しかし、曹操さんの一言に黒髪さんは動きを止めて曹操さんの方を向く。でも、何故止めたのだろうか？ 疑問に思っ
て曹操さんを見つめると、曹操さんはこちらを向き

「貴女、何故魏のことを知ってるの？」

「・・・・・・・・華琳さま？」

曹操さんの言葉に青髪さんが不思議そうに尋ねる

「魏というのはね。私が考えていた国の名前の、候補の一つなのよ」

「・・・・・・・・・・は？」

「どういう意味ですか・・・・・・・・・・？」

「まだ春蘭にも秋蘭にも言っていないわ。近いうちには言いつつもり
だったけれど・・・・・・・・・・」

そう言えば、曹操さんがまだ官軍として軍を動かしてるとなると、
時期的に後漢末期か。 あちゃー、この時期はまだ曹魏は創られて
なかったよ、失敗したなあ

「貴女、何者？」

「えっと……………」

「……………まさか、五胡の妖術使い？」

「華琳さま！ お下がり下さい！ 魏の王となるべきお方が、妖術
使いなどという怪しげな輩に近づいてはなりません！」

魏っていきなり使ってるし！

「ち、違いますよ。 私は 」

「問題無用！」

私が誤解を解こうと口を開こうとするが、黒髪さんは聞く耳がない
のか、斬り掛かってくる。 はぁ……………仕方がない

「止めなさい、春蘭！」

「華琳さま、何故止めるのですか!?!」

埒が明かないため、反撃に移ろうとした時、黒髪さんの後方から大きな声があがる。そして、動きを止めた黒髪さんが曹操さんの方を向いた

「春蘭・・・・・・・・？」

「う・・・・・・・・っ！　わ、分かりました」

「貴女、名前は？」

曹操さんの威圧で大剣を収める黒髪さん。そして、曹操さんが私の方を向き、名前を尋ねてきた。　そう言えば、名乗ってなかったな

「私は姓が龍、名が政也、字はありません。　あ、勘違いをしていますよ」

「あら貴女、男だったのね、驚きだね。　それでね、少し貴女に興味があるの。　私たちと一緒に城にこない？」

えっと、驚きだと言って割には、あんまり驚いたようには見えないけど

「華琳さま！？　こんな得体の知れない者を城に行かせるつもりで

すか!？」

「大丈夫よ、春蘭。彼女に殺気はないわ」

信用してないですね、はい。完全に彼女って言ってるもん

「姉者、そう言うことだ。君もそれでいいな」

「別に構いませんよ(ニコッ)」

「そ、そう。なら、二人とも帰るわよ／＼／＼／」

「「ぎよ、御意／＼／／／」」

私が笑顔を向けて肯定すると、三人が顔を赤くする。熱でも出たのかな？

今、私は曹操さんの玉座の前に立っている。ちなみに曹操さんの玉座の脇には黒髪さんと青髪さんが控えている

「では、改めて私の名は曹孟徳。この陳留の勅史をしているわ」

「私は龍政也と申します。それで、何を尋ねたいのでしょうか？」

一応、目上の人なので敬語だ。ま、目上の人に限らず、初対面の人には敬語になってしまっただけね

「そうね。まずは私が考えていた魏のことを何故、知っていたのかということ、私の名を当てたことね」

ここが並行世界だパラレルワールドと言うことははっきりしてるけど、とりあえずここは自分の世界の過去という体で説明した方が良かな

説明中 説明中 説明中

「……………それは、どういうことなのだ？」

「私は、この世界で言う……………未来から来た人間らしいってことです」

できるだけ分かり易く説明したつもりだったが、分からないという表情をした黒髪さんが尋ねてきたので、さらに簡潔に説明をした

「・・・・・・・・秋蘭、理解できた？」

「・・・・・・・・ある程度は。しかし、俄かには信じがたい話ですな」

やはり、信じられないみたいだなあ。まあ、それは仕方がないか、私も信じられないし

「・・・・・・・・ふむ」

「分かってませんね、その顔は？」

「・・・・・・・・文句あるか」

「いいえ。えっと、例えばですね」

「おう」

「あなたが何らかの事件によって、どこか違う場所に連れて行かれ、項羽や劉邦に会ったようなものです」

「・・・・・・・・・・はあ？ 項羽と劉邦と言えば遙か昔の人物だ。そ

んな昔の英傑に今の私が会えるものか。 何を馬鹿な例えを……
」

「そういう状態なんですよ、今の私が」

「……な、なんと」

「確かに、それならば……龍が華琳さまの名や考えていた魏という国の名を知っていたことも、説明が付くだろうな」

「だが……貴様はどうやってそんな技を成し遂げたのだ。それこそ、五故の妖術ではないか」

「そうだな。 普通はそう考えるか……」

「うーん、私にも分かりません。 ですが、私がここにいるのは事実ですから」

「……南華老仙の言葉に、こんな話があるわ」

「南華老仙……莊周が夢を見て蝶となり、蝶として大いに楽しんだ後、目が覚める。 ただ、それが果たして莊周が夢で蝶になっていたのか、蝶が夢を見て莊周になっていたのかは……誰にも証明できないというお話ですね」

「あら、博識ね。 そうよ」

曹操さんは何だか嬉しそうだ。 まあ、この胡蝶の夢は、結構好きだったから覚えていただけなんだけどね

「な、ならば華琳さまは、我々はこやつの見ている夢の登場人物だと仰るのですか!？」

「そうは言っていないわ。 けれど私たちの世界に、政也が迷い込んできたのは事実、と考えることもできるということよ」

「は、はあ……………」

「政也が夢を介してこの世界に迷い込んだのか、こちらにいた政也が夢の中で未来の話を学んできたのかは分からない。 もちろん、私たちにもね」

曹操さんの説明は簡潔で分かり易い。 ただ、違うのはここが夢ではなく、現実だということだ。 何故、私がここにきたのかは分からないが、為すべきことがあるのだらう。 だったら、私はその為すべきことをするまでだ

「春蘭。 色々、難しいことを言っただけ……………この龍政也は、天の国から来た遣いなのだそうよ」

あれこれ考えていたら、曹操さんが何やら黒髪さんに言っていた。 天の国から来た遣いか……………まあ、五胡の妖術遣いや、未来から来たなんていう突拍子もない話をするよりは、そう説明した

方が分かり易くてすむ。さすが、曹操さんだ

「・・・・・・・・た、確かに天の遣いというとしっくりきますね」

あの黒髪さんが納得するということは、やはり天の遣いということ分かり易いわけか・・・・・・・・

「ふふ。では、貴女もこれから自分のことを説明する時は、天の国から来たと、そう説明しなさい」

「分かりました」

「・・・・・・・・あら、本当に貴女は賢いわね。貴女、私のところで働くきない？」

「別に良いですが・・・・・・・・」

「良いですが？」

「他の武官や文官の方がどう言うか・・・・・・・・」

どこの馬の骨が、試験も何もしないで仕えることになったとなれば、他の仕えてる人達が文句を言うかもしれない

「そう？ 大丈夫だと思うけれど・・・・・・・・貴女がそうしたいの

なら試験をやりましょう」

「はい」

「では、明日試験を行うわ。春蘭は武官として、秋蘭は文官として試験官をやりなさい」

「はっ！」

曹操さんは笑いながら、適性試験を行う旨を説明していく。私の力がどのくらいあるのか見たいらしい。ご期待に沿えるかどうか分からないけど、精一杯やるとしよう

「あ、そう言えば春蘭と秋蘭は名乗ってなかったわね。政也、試験官の名は知つときたいわよね？」

「あ、いえ。多分、分かると思いますので大丈夫です」

「あら、そうなの？　じゃ、言ってみなさい」

曹操さんは試すかのように二人を私の前に差し出してきた。ここは、知らないというべきだったかなあ（苦笑）

「……夏侯惇さんと夏侯淵さんですね」

「はっ！？」

「あら、凄いわね」

指を指しながら言うと、二人は驚きの声をあげた。曹操さんはこうなることが分かっていたのか、笑顔で賞賛する

「じゃ、部屋に案内するわ。ついて来なさい」

「あ、はい」

曹操さんは玉座から立ち上がると私の部屋になる場所まで案内しました。ちなみに、夏侯惇さんと夏侯淵さんはそのすぐ後ろでついていている。私は、その後ろからついていく

「ここが貴女の部屋よ。後のことは使いの者に伝えるから」

「分かりました」

曹操さん達は、私を案内するとその場から去っていく。私は、とりあえず三人が見えなくなるまで待ってから、部屋の中に入った。そして、腰から鞘を抜いて奥にあるベットにおき、机に向かうと今の状況を確認していく

まず、私がいる世界は三国志、しかも趙雲、程立、曹操といった有名な人物は皆、女性である並行世界

パラレルワールド

今、分かつてるはそれだけか……

「まあ、なるようになるか……」

そう結論づけた私は、明日の試験に向けて寝ることにした。 え？
文字とかは大丈夫かって？ 一応、読み書きはできるよ。 大学
の講義で習ったからね。 さて、文官の方は何とかなるけど、武官
の方が問題だなあ

「ま、今から心配しても意味がないや。 明日、頑張ろう」

そう呟いた私は、そのまま眠りについたのであった。 あ、女だとい
う誤解を解くの忘れてた……ま、いつか分かってくれるよ
ね……

その男、独眼龍くさ (後書き)

政也はあの人にも女扱いされるかも？

感想、質問は随時、受け付けております

その男、独眼龍くろく（前書き）

第三話、更新しました

楽しんでくれたら嬉しいです

では、本編をどうぞ

その男、独眼龍くさ

窓から差し込む光によって目を覚ます……いつの間にか、熟睡していたらしい。えっと、左目から感ずる光の量からいつて、まだ朝になって間もないみたいだな

「ふう………本当に三国志の時代、それも並行世界パラレルワールドに来たんだなあ」

脇においてあった特製の眼帯をつけてから、辺りを見回す。ここは実家の私の部屋ではなく、昨日案内された部屋。それで実感が沸いてきて、そう呟いてしまう

「さてと、今日は試験だから、少し身体を動かそうか………」

そんな事を呟きながら身体を解していく。正確な時間は教えてもらってはいないけど、そのうち、遣いの人が来るだろうからね

私は『庭にいます』という書き置きを書き、白狐を持って、部屋を出た

「えっと、庭はどこかな？」

そう呟きながら城の中を散策していく。それにしても、広い城だなあ。　そう思いながら、城を散策していった

歩くこと数分、庭らしき広い敷地を見つけた

「さて、白狐。初めて、お前を使うわけだけど、言っておきたいことはあるかい？」

『特にない。　政也の思う通り、我を使えば良い。　我は、それに応えるだけ』

「そっか。　でも、何か気になることがあつたら言ってくれ」

『分かった』

私は白狐と話した後、鞘から抜いて上段に構えると素振りを開始する

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ」

リズムよく振って白狐の感覚を掴んでいく。　これは………
良い感覚だ。　これならいつも以上に扱えるかもしれないぞ

親父が私に授けようとした理由が、少し分かる。　白狐は今までの竹刀や刀より、私の腕にじっくりとくる。　この感覚は生まれて初めてかもしれない

「さて、素振りはいくらにしていって……試験に向けてちょっと動いとうか」

そう呟いて抜刀法十本を行っていく

一本目、上段先取り刀法

白狐を中段に構えた後、左上段に構えて相手との間合いを詰め、相手が突いてくるのを察知して右足から右斜め前に大きく踏み込んで体をかわし、すばやく相手の左面を斬る。斬った後、右足を引きながら左上段の構えとなつて残心を示し、さらに左足を引きながら左手を柄から離して左帯に送ると同時に袈裟に振り下ろしての血振りをを行い納刀する

二本目、左払い左袈裟刀法

白狐を抜刀、中段に構えて間合いを詰め、左足を一步踏み出すと同時に、相手の刀をすばやく左に払って振り上げ、右足から右斜め前に踏み込んで体をかわし、相手の左肩口から左袈裟に斬り下ろす。足は逆八の字に開き、等しく両膝を浅く曲げ、腰を落として斬る。三步退がりながら、切っ先を下げ、倒れた相手に切っ先を向けて残心を示し、横の血振りをを行い納刀する

三本目、右払い小手刀法

白狐を抜刀、中段に構えて間合いを詰め、送り足で一步進むと同時に相手の刀を右に跳ね上げて払い、更に左足で一步踏み込んで相手の右小手を斬り落とす。三步退がりながら切っ先を下げ、倒れた

相手に切っ先を向けて残心を示し、横の血振りをを行い納刀する

四本目、左面・右袈裟刀法

白狐を抜刀、中段に構えて間合いを詰め、左足を一步踏み出すと同時に、相手の刀をすばやく左に払って振り上げ、右足から右斜め前に踏み込んで体をかわし、相手の左面を斬る。さらに白狐をかえし、大きく振り上げると同時に、左足を踏み込んで腰を落とし右袈裟に斬り下ろす。この時の足は、二本目と同じ逆八の字になる。

三步退がりながら切っ先を下げ、倒れた相手に切っ先を向けて残心を示し、横の血振りをを行い納刀する

五本目、右面・左袈裟刀法

白狐を抜刀、中段に構えて間合いを詰め、右足を一步踏み出すと同時に、すばやく相手の刀を右に払い上げ、そのまま刀を振り上げて左足から左斜めに踏み込んで体をかわし、相手の右面を斬る。さらに白狐をかえし、大きく振り上げて、右足を右に踏み込み、腰を落として相手の左袈裟を斬り下ろす。この時の足は、二本目と同じ逆八の字になる。三步退がりながら切っ先を下げ、倒れた相手に切っ先を向けて残心を示し、横の血振りをを行い納刀する

六本目、左袈裟・胴刀法

白狐を抜刀、中段に構えて間合いを詰め、左足を一步踏み出すと同時に、相手の刀をすばやく左に払って振り上げ、右足から右斜め前に踏み込んで体をかわし、相手の左肩から左袈裟に斬り下げる。さらに白狐をかえして、左足から右斜め前に踏み込んで、相手の右胴を水平に斬り抜く。三步退がりながら切っ先を下げ、倒れた相手に切っ先を向けて残心を示し、横の血振りをを行い納刀する

七本目、逆袈裟・袈裟刀法

白狐を抜刀、中段に構えて間合いを詰め、右足を一步踏み出すと同時に相手の刀をすばやく右に払い、左足を出しながら左脇構えをとり、更に右足を斜め前に踏み込むと同時に右逆袈裟に斬り上げる。

すぐに白狐をかえして、腰を落として左袈裟に斬り下げる。この時の足は、二本目と同じ逆八の字になる。 三步退がりながら切っ先を下げ、倒れた相手に切っ先を向けて残心を示し、横の血振りをを行い納刀する

八本目、抜き打ち・突き刀法

この技は、相手に向かい立つ位置を左にずらしてから歩み寄り、間合いに入るや左足前で白狐に手を掛け、右足を相手に向けて踏み込むと同時に片手抜き打ちに相手の右頸部を斬る。 続いて、左・右足とさがって間合いを取り、ただちに中段に構え右足から踏み込んで相手のみぞおちを両手で突く。 一本目と同様に、左上段の構えとなって残心を示し、袈裟血振りをを行い納刀する

九本目、三段斬り刀法（右面・左袈裟・胴）

基本姿勢で右足から進み、左足前で白狐に手を掛け、右足で踏み込むと同時に片手抜き打ちに相手の右面を斬る。 続いて両手で相手の左肩口を左袈裟に斬り下げ、返す刀で右胴を水平に斬り抜く。

この時、左袈裟に斬り下げた刀を止める事なく瞬時に右胴を斬る。 三步退きながら切っ先を下げ、倒れた相手に切っ先を向けて残心を示し、横血振りをを行い納刀する

十本目、三段斬り刀法（斬り上げ・左袈裟・胴）

基本姿勢で右足から進み、左足前で白狐に手を掛け、刃が下になるように鞘を返す。右足で踏み込むと同時に右片手で右逆袈裟に斬り上げ、続いて両手で左袈裟に斬り下げ、返す刀で右胴を水平に斬り抜く。この時、左袈裟に斬り下げた刀を止める事なく瞬時に右胴を斬る。三步退きながら切っ先を下げ、倒れた相手に切っ先を向けて残心を示し、横血振りをを行い納刀する

「ふう……………」

息を整えながら私は途中で感じていた気配の方を振り向き

「曹操さん、何か用ですか？」

と尋ねると、壁に体重を預けていた曹操さんが一瞬、驚いた顔をする

「あら、よく分かったわね、私だって」

「気配を読むのが得意なだけですよ」

近づいてきた曹操さんにそう弁明する。生れつき片目だった私は、剣術を習うために気配を探る修業をしていた。そのお陰で、気配だけで人物がある程度、特定できるようになったただけなので別段、誇るものではない

「で、私に何か用でしょうか？」

「いいえ、偶然通り掛かったら貴女を見つけただけよ。それにしても、貴女のさっきの動きはなかなかのものだったわ」

「お褒めいただきありがとうございます」

「そんなに畏まらなくても良いわよ。さて、ちょうど良い時間ね。試験を始めましょうか」

「はい」

『ついてきなさい』という曹操さんの後をついていくと、試験会場は玉座の間だった。中に入ると既に文官試験官の夏侯淵さんが準備を整えていた。その脇には武官試験官の夏侯惇さんもいる

「さて、龍。これから、文官の試験を始めるぞ」

「はい、お願いします」

「まずは」

夏侯淵さんはそう言うと、何冊かの書物を机の上におく。そして、一番上の書物を指差し

「この書物の最初の方の文章を読み上げて、その内容を自分なりに解釈してくれ」

「あ、はい」

夏侯淵さんの指示の下、書物を読みあげていく

読み終わった後、その内容を解釈していった。所々、曹操さんの質問があつたが、何とか自分なりの考えを述べる事ができたと思う

「うむ……華琳さま」

「ええ、次に行ってもかまわないわ」

「はつ。 龍、次は、いくつか質問するから、それに答えてもらいたい」

「はい」

質問か……。恐らく、この戦局だったら部隊をどういう風な動きをさせるのかということを知りたいのだろう。というか、戦局の指示とかはしたことないしなあ……。大丈夫かなあ？ そう
いう心配を余所に夏侯淵さんからの質問が始まってしまった

「この状況の時はどうする？」

「……………えっと、この時の軍の配置と言つのは?」

「うむ。この資料にあるように」

「うーん、そういうことなら、この場合は」

とこんな具合に自分からも質問をしながら、夏侯淵さんの質問に答えていった。幸い、分かり易いように資料をもらえたので、自分なりの部隊の動きを言うことができた。ただ、夏侯淵さんは表情も気配もあまり変わらないから、自分の考えが正しいのか間違っているのが分からない

「政也、最後に私から質問いいかしら?」

「あ、はい」

「秋蘭」

「はい」

質問を終えて曹操さんと夏侯淵さんが話し合っていたら、曹操さんがそう話を切り出してきた。何だろうと思つてたら、夏侯淵さんが新たな資料を持ってきた。えっと、これは区画整理の資料……?

「貴女なら、どう整理するのかしら？」

何故、私に聞くのかな？ まあ、良いや。 えっと……………

「これは曹操さんがまとめたものでしょうか？」

「ええ」

「やはり、そうですか……………」

流石、曹操さんだな。 これだけ、素晴らしい区画整理の案がだせるなんて……………

「何か、意見はあるかしら？」

「そうですね……………この区画だと火事が起きた時、一気に全てが焼かれてしまいますから、まずは」

私は資料を見ながら、気になったところを述べていく。 一応、江戸時代での江戸の区画の案を用いている。 現代の案を用いても曹操さんなら実現しそうだけど、今、可能なのは江戸時代での区画整理だからね

「……………良い案ね。 参考にさせてもらっわ」

曹操さんはそう言うかと夏侯淵さんと話し合いをしていく。恐らく、文官の試験の合否を話し合ってるのだろう。うーん、合格しないと武官として合格しなくちゃいけない。．．．．．それだと、さつきからソワソワと私の方を見ている夏侯惇さんと戦って認められないといけないんだよね。嫌だなあ．．．．．

「龍、結果の方は武官の試験が終わってから伝える」

「え？ あ、はい」

そうなのか．．．．．結果は武官の試験の後か．．．．．はあ、鬱だ．．．．．

……華琳SIDE……

龍政也．．．．．昨日も思ったけど、相当博識ね。書物の解釈もほとんどが私の解釈と同じ。違ったところで私の方が感心させられてしまった。それに、区画整理での意見．．．．．あれは凄い。どうしてその考えができるのかしら？

秋蘭とも話し合ったけど、文官として彼女は存分に私の役に立ってくれると確信してる。ふふ、ますます気に入ったわ。けれど、男というのは信じがたいのよね．．．．．

「次は私の番だな！！　ついてこい！！」

そう考えている時、春蘭が政也のところに近づいてそう告げると鍛錬場へ向かう。相当、政也と戦いたいみたいね。かく言う私も興味がないと言えば嘘になるわ。今朝の政也の動きは見事なものだったしね

「あ、ちよつと待ってくださいよ」

「秋蘭、私たちも向かいましょう？」

「はっ」

春蘭の後を苦笑しながら政也が、その後ろを私たちもついていく。

政也、貴女の武を見せてもらおうわよ

……SIDE　END……

夏侯惇さんの後について行くと、兵士達が訓練をしている場所（鍛錬場かな）へとやってきた。えっと、ここで試験をやるのかな・・・？

「龍、始めるぞ」

夏侯惇さんがこちらを向き、大剣を構えながらそう告げる。　　はあ・
・・・・仕方がない、頑張るか。　　そう思った私は白狐に

「行くか、白狐」

と呟き、中段に構える。　　すると、白狐は私に呼応するかのようにより一層、輝いていく。　　それを見ると、何だか心が落ち着いてくる・・・・夏侯惇さんの殺気も気にならないほど、心が澄んでくるのを感じた

……華琳SIDE……

「龍、始めるぞ」

春蘭は政也の方を向き、自身の愛剣・七星餓狼を構えながらそう告げる。　　一方、政也は涼しい顔をしながら、腰に差していた剣を抜く。　　それにしても、珍しい形をした剣ね・・・・

「行くか、白狐」

政也は剣にそう呟くと、中段に構える。　　すると、白狐と呼ばれた剣がより一層、輝きだしたように思えた。　　それを握る政也は春蘭の殺気を浴びながら、涼しい顔が凜々しい顔へと変化していく

「・・・・・・・・始め!!」

そして、私は両者を見遣って戦闘開始の合図を発する。それと同時に春蘭が一気に踏み込み、大剣を振り下ろす

「はぁぁぁぁあつ!!」

という気合いと共に振り下ろされる春蘭の一撃。政也は剣を真横に構え「　　つて、それではやられるわよ!？」

【ガキイイン!】

「何っ!？」

しかし、予想に反して春蘭の一撃は防がれる。春蘭はその予想外の出来事に驚きの声をあげている。私や秋蘭も目を疑う。あの細い刀で春蘭の一撃を受け止め、しかも見るかぎり刃毀れすらしていないのだから

「く・・・・・・・・つ!!」

受け止めていた政也が一気に押し返すと春蘭は受け止めたことによ

る驚きのため、一瞬体勢が崩れてしまう。しかし、すぐさま体勢を立て直して剣を横風ぎに振るった

それに対して、政也は受け流しながら後方へと下がり、攻撃をかわす。その後、一気に間をつめて斬りつけようとするが、春蘭は素早く剣を引き戻して攻撃を受け止めて押し返した

「やるではないか、龍!!」

嬉々とした表情を浮かべる春蘭。　　閨以外でこんな顔をしたのを見るのは久しぶりね

「流石、曹操さんの右腕と称された御方だ。　　私の本気の一撃が受け止められたのは久しぶりです」

政也もこの戦いを楽しんでいるかのように笑顔を向けて春蘭を褒める。　　政也のあの急加速についていけるのは我が軍では片手で数えられるぐらいでしょうね

「ふっ、それほどもあるがな!!」

褒められた春蘭はそう叫ぶと、反撃の隙を与えないように連続で攻撃を繰り返す。　　政也はその攻撃を避け続けてはいるが、攻撃に移せないでいる。　　でも、その避け方が美しい。　　まるで、演舞を見

ているようだわ

「どうした、避けてばかりいたら、私に勝てないぞ？」

「そうですね。では、全力で行かせていただきます（シュッ）」

「く……………っ!？」

政也はそう言うのと春蘭の攻撃を避けた時、瞬間的に春蘭の懐に飛び込んで剣を振り下ろす。春蘭は驚いたような表情をしながらも剣を盾代わりにして防いだ

その一撃が重たかったのか、苦悶の表情をする、春蘭

「これも防がれるとは思いませんでした」

「……………流石に今のは肝が冷えたぞ」

防がれたことに驚く政也と気丈に振る舞ってはいるが、冷や汗を流している春蘭。これは……………

「両者そこまで!！」

私はこのままでは春蘭が負けると判断して、勝負を終わらす。そ

して、二人が剣を納めて元の位置に戻ると私を見てきたので、私は春蘭に視線を向けて尋ねる

「春蘭、彼女はどうかしら？」

……SIDE END……

「これも防がれるとは思いませんでした」

「……………流石に今のは肝が冷えたぞ」

私の全力の一撃を防ぎきった夏侯惇さんはやはり凄い將軍だ。まあ、歴史に名を残した人は伊達じゃないと言うことかな……………

さて、ここは仕切り直し

「両者そこまで!」

と思っていたら曹操さんが終わりを宣言してきた。疑問に思ったけど、終わりなら仕方がない。そう思った私は白狐を収めて元の位置へと戻る。すると、曹操さんが夏侯惇さんの方を向いて

「春蘭、彼女はどうかしら？」

と尋ねる。　　って、私は男ですってば……………

「……………政也の武は私と同等か、それ以上かと」

「あら、春蘭がそう言うなんて珍しいわね」

はっ？　私が夏侯惇さんと同等か、それ以上の武を持つてる？　な、何を言ってるんでしょうか……………夏侯惇さん？

しかも、曹操さんの方を見ると夏侯惇さんがそう言うことを分かっていた表情をしているし

「華琳さまも分かってらっしゃるかと思いますが？」

「何のことかしら？」

「……………あのまま戦えば、私が負けていました」

「春蘭がそう言うならそう言うことにしときましょう」

あの、私が夏侯惇さんに勝つなんてありえないと思います……………
……………どういふことが説明を願いたいです、はい

「では政也」

「あ、はい」

置いてきぼりにされて呆けていたら、曹操さんに声を掛けられたため、我に返る。曹操さんは何だか嬉しそうに私を見つめていた。えっと、何がそんなに嬉しいのでしょうか……？

「試験の結果を言っわよ」

「はい」

「政也、貴女には文官と武官、両方をやってもらっことにしたわ」

「……………え？」

武官と文官を両方ですか……………？

「どうかしたのかしら？」

「い、いえ、何でもありません。えっと、夏侯惇さんと夏侯淵さんは……………」

「二人も同意見よ、ね？」

「「はい」」

曹操さんの問いかけに元気よく答える夏侯惇さんと夏侯淵さん。
なるほど、二人も同意見ですか……。何だか買被りすぎな感じがするけど、まあ、そう決まったのなら私は従うだけだ

「分かりました」

「ふふ、期待しているわよ、政也」

私が了解すると、曹操さんは笑顔になってこちらを見据えてきた。
うつ、その期待の眼差しが眩しい……。でも、頑張りますか

「それでは改めて名乗らせてもわうわ。私の名は曹操、字は孟徳、真名は華琳よ。貴女に私の真名を預けるわ」

「私の名は夏侯惇、字は元讓、真名は春蘭だ」

「私は夏侯淵、字は妙才、真名は秋蘭という。よろしく」

「私は龍政也です。政也が真名はございませんので龍か政也とお呼びください」

こうして私は後の霸王・曹孟徳の家臣として働き始めたのだった。
さて、頑張りますか！

おまけ

「あ、そうそう、政也」

玉座の間に戻ったとき、華琳s 殿が何か思い出したのかこちらを向く。 一体、どうしたんだ？

「何でしょうか？」

「貴女、男とか言ってたわよね？」

「え？ あ、はい」

男とか言ってたじゃなくて、正真正銘の男なんですが……

「それ、禁止ね」

「はっ？」

「男と言つの、禁止」

「い、いや、しかし……私は本当におt」

「き・ん・し・よ」

「は、はい……………」

反論しようとするけど、華琳殿の言いようのない迫力で頷くことしかできなかった。　　はあ……………何でこうなった？

その男、独眼龍くっ（後書き）

男と言うのを禁止された政也の運命は如何に・・・

感想・質問は随時、受け付けております

その男、独眼龍〜4〜（前書き）

第4話、更新しました

レイン様、感想ありがとうございます
では、本編をどうぞ

その男、独眼龍 4

試験の翌朝、お茶が飲みたくなつたので厨房に向かう。だいたいの城の配置は、昨日把握していたため、何なく厨房へと着くことができた

厨房では従者2人が忙しなく働いていた

「ご苦労様」

「はっ！ りゅ、龍さま！？」

「な、なな、何かご用でしょうか！？」

声をかけた途端、物凄く慌てた様子でこちらを向く従者2人・・・
・そんな緊張しなくても良いのに（苦笑） とは言え、私の事は昨日、伝わっているみたいだし、仕方がないと言えば仕方がない

「そんなに驚かなくても良いよ。ただ、お茶が飲みたくなつただけだから」

「あつ、お、お茶ですね」

「い、今すぐおい」

「あ、良いよ、良いよ。私が入れるから」

「え？　しかし」

「良いの。　貴女方は今の仕事に専念してよ（ニコッ）」

「「あ、はい／＼／＼」」

と、こんなやり取りをして私が笑顔になると、従者２人は顔を赤くして俯いてしまった

「どうしたの？」

「「いえ、な、何でもありません！！」」

「そ、そう。　じゃ、勝手にお茶を入れさせていただくよ？」

「「あ、はい」」

私は従者２人に許可をもらうと、茶葉を確認する

「ふむふむ、この茶葉だとお湯の温度は」

と呟きながら、湯呑にお茶を入れていく。　同じ緑茶でも茶葉によ
ってお湯の温度や入れ方が多少異なるので、注意が必要だ

「……うん、美味い」

「私にもくれないかしら、政也？」

お茶を入れ終わったので、近くの椅子に座って啜っていたら、後ろから華琳殿の声がした

「ん？ 華琳殿、何か用ですか？」

「いいえ、通りかかっただけよ。で、私にもお茶を入れてくれないかしら？」

「ええ、良いですよ」

私は再度、お茶を入れていく。華琳殿は私の手をじっと見て

「へえ」

と感心した声を出してきた

「ん？ どうかしました？」

「いいえ、なかなかの入れ方だなと思っただけよ」

「それは光栄です。どうぞ、口に合うかどうか分かりませんが」

「ええ、頂くわ」

華琳殿は湯呑に口をつけてお茶を飲んでいる。何故か、従者2人がソワソワとその様子を見ているけど……

「これは……」

華琳殿が驚いた表情をしている。ん？ 華琳殿にはこの苦さがちよつど良いと思ったんだけど、ちよつと苦くしすぎたかな……

「口に合いませんでしたでしょうか？」

「いいえ、美味しいわ。今まで飲んできたお茶よりもね」

「それは良かった」

華琳殿はそう言うのと美味しそうにお茶を啜っていく。そんなに喜んでもらえるかと入れた甲斐がある

「華琳さま！！こちらにおいででしたか！」

「春蘭、どうしたの？」

「今、城下で牛と猪が暴れてると言う情報が」

「「はっ？」」

牛と猪が暴れてる？ それはどういう状況だい？

「・・・・・・・・秋蘭、詳しく説明してちょうだい」

「はい」

華琳殿が春蘭殿に遅れてやってきた秋蘭殿に尋ねると、秋蘭殿は掻い摘んで話をしてくれた

今朝、猪と牛を運んでいる途中に仕留めたと思っていた猪が突如暴れ出して荷車を壊し、逃走。そして、その直後に興奮した牛も暴れだしたというわけらしい。な、何というか・・・・・・・・

「それで警備の者はどうしたの？」

「はい、それがその騒動で街は混乱、その混乱に乗じて賊が入ったとかでその対応に追われていまして」

「そう・・・・・・・・」

華琳殿は秋蘭殿の報告を聴いて考えこむ仕草を取る。そして、徐に顔を上げて春蘭殿と私の顔を見つめた

「春蘭は、警備の者の手助けを！ 政也は暴れている猪と牛を何とかしてちょうだい！」

「はい、華琳さま！！　いくぞ、政也！」

「はいはい」

華琳殿の命令で春蘭と私が城下の混乱を治めることになった。はてさて、猪と牛を止められるかなあ

……華琳SIDE……

「はい、華琳さま！！　いくぞ、政也！」

「はいはい」

政也は春蘭の嬉々とした表情に苦笑しながら、春蘭と共に城下へ向かった

「華琳さま」

「何、秋蘭？」

「猪と牛は姉者の方がよろしいのではないのでしょうか？」

「そうね。でも、政也は昨日、私の臣下になったのよ？ 警備の者にはまだ、政也の事を伝えていないし、春蘭がいった方が良いでしょう」

「……………それもそうですな」

秋蘭は少し考えると私の言いたいことが分かったみたい。さて、大丈夫だと思うけど、政也は心配だね……………

「政也のところについてみようかしら。ねえ、秋蘭」

「はい」

私と秋蘭は、お忍びで城下へ向かった。もちろん、政也の初仕事を見守るためよ

……SIDE END……

「政也、牛と猪の居場所は分かるか？」

「ああ、獣の気配は把握している。春蘭殿は警備隊の方へ行って

くれ」

「分かった」

私と春蘭殿は城下に出るとそれぞれの場所へ向かう。うーん、でも、ちょっと人が多いな。それなら……

「はっ！」

私は跳躍すると屋根に登る。そして、屋根伝いに獣たちがいる場所へ向かった

……華琳SIDE……

城下へでると、政也が屋根に登って、屋根伝いに移動しているのが見えた

「1回の跳躍で屋根まで登ったみたいです」

「そう……本当に政也には驚かされてばかりね」

ふふ、面白い。政也、貴女の事、もっと知りたくなったわ

「華琳さま」

「ええ、いきましよう」

私は政也を追って秋蘭と共に騒ぎになっている場所へ向かった

……SIDE END……

屋根伝いに移動していると、人だかりのできている場所があった。そこにいってみると、牛と猪が子ども達の周りをグルグルと回っていた。民衆は、牛と猪に阻まれて子ども達を救出する事ができないみたいで、頻りに子ども達に動くなと言いつけている

「さて、どうやって止めるかな……むっ！」

どうするか考えている時、1人の女の子が動き出してしまった。それに向かって猪と牛が突進してきているのが見えた。マズい……

「「「「「きゃああああああっ!?!」「」「」」

……華琳SIDE……

「「「「「きゃああああああっ!?!」「」「」」

「!? 華琳さま!!」

「ええ、急ぎましょう!」

民衆達の叫び声が聞こえてきたため、私と秋蘭は急いで叫び声が聞こえてきた場所へ向かう。そして、人込みをかき分けて通り抜けた先では

「うわあああん!! お母さーーん!!」

「もう、大丈夫だよ……」

牛と猪を髪を結んでいた紐で抑えている政也の姿があり、泣いている女の子を安心させるように優しく話しかけていた

「今のうちに子ども達をお願い」

「……お、おう!!」

政也が民衆にそう告げると、呆けていた皆が子ども達を救出に向かう

「……嬢ちゃん!! 皆、助けたぞ!」

「それは良かった・・・・・・・・」

救出後、皆が政也に声をかけると牛と猪を押し倒して紐を解く。
そして、立ち上がった政也の解かれた髪が揺れる・・・・・・・・

「・・・・・・・・美しい」「」「」

その姿を見た民衆から、その言葉が零れる。 太陽の光で輝く政也の髪は、何とも言えない美しさがあった。 そして、政也の澄ました表情と合わさって幻想のように感じる。 本当に美しい・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

政也はじつと牛と猪を見つめている。 倒れていた牛と猪は起き上がり、雄叫びを上げて政也に突進してきた

「「「「嬢ちゃん!! 逃げろ!!」「」「」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

皆が政也に声をかけるが、政也は逃げる素振りも見せない。 しかし、私は安心している。 だって、政也が自身の刀 『白狐』を

鞘から抜いたのだから

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「「「「嬢ちゃん!?」「」「」」

政也が牛と猪に向かって歩き出したため、皆が政也を呼ぶ。牛と猪が政也に襲いかかった瞬間、政也の腕が僅かに動いた。そして、牛と猪は襲いかかったまま、そこから動かなくなる

「・・・・・・・・狐步斬り」

牛と猪の間を素通りした政也が、そう呟きながら『白狐』を鞘に納める。すると、牛と猪の身体が真つ二つに切り離された・・・・・・・・これで大丈夫ね

「秋蘭、帰りましょう」

「はい」

私と秋蘭は踵を返して城へ戻っていく。その後ろでは・・・・・・・・

「「「「「うわああああああっ!!」「」「」」

民衆たちの喝采が聞こえていた。 後は任せるわね、政也

……SIDE END……

「おい、政也」

「ん？ おお、春蘭殿。 そっちはもう良いのかい？」

「ああ、全員、捕まえた」

「それは良かった」

騒ぎが落ち着きを取り戻した時、春蘭殿が何人かの警備隊と共にやってきた。 どうやら、賊の件は方がついたようだ

「で、そっちの首尾はどうだ？」

「何とか大丈夫だよ。 あ、そうそう。 この中に、この牛と猪を運んできた人はいるかい？」

「へ、へい。 あっしらすです」

髪を結びながら牛と猪を運んできた人物が見物人の中にいるか尋ねると、3人の男たちが名乗り出てくる。 どうやら、気配から言うて狩人みたいだな

「牛と猪を斬ってしまったが、大丈夫だったかい？」

「へ、へい。むしろ、こっちが申し訳ねえことで。猪は仕留めたと思ってたんですが、どうやら気絶していただけだったようで」

「牛はどういう経緯で？」

「へい。それは」

という風に事情聴取を行っていく。今回は狩人達の驕りが、この騒ぎを引き起こしたみたいだ。そう思った私は狩人達に厳重注意と確認作業の徹底を約束させてこの場を治める。その後、春蘭殿と城へ戻っていると、さっきの子ども達と親御さん達が近づいてきて、その中の代表の女の人が

「先程はこの子たちを助けていただき、ありがとうございました」

「いえいえ、当たり前的事をしたまでのこと、お礼を言われるほどではないよ」

「しかし、それでは私たちの気持ちか……」

「それじゃ、これに書いてあるものを今日中にお城に届けてほしい。できるかな？」

「え？ は、はい！ 大丈夫です！」

親御さん達に届けてほしいものをメモしたものを渡しながら頼むと必ず届ける旨を伝えて、子ども達と去っていく。それを見送った後、春蘭が

「政也、あれに書いたものとは何だ？」

「ん？ ああ、あれはあの人達の商売品だよ」

「そうなのか？」

「ああ」

と尋ねてきたので、メモしたものを伝える。メモしたものはどれもあの人達に取り扱っているものばかりである。何故、分かったのかは企業秘密这件事情で

「………という事にしましたが、よろしかったでしょうか？」

「ええ、大丈夫よ。じゃ、政也は秋蘭の手伝いをして頂戴」

「はい」

城へ戻ると、ひと通り華琳殿に報告する。その後、秋蘭殿の手伝いとして文官の仕事に取り掛かった。しかし、秋蘭殿の手伝いの

はずなのに私の方の竹簡の量が多い気がする

「秋蘭殿、私は手伝いですよね？」

「ああ、そうだが？」

「何だか、こっちの量の方が多いk」

「気のせいだろう」

「そうですか？」

「ああ」

竹簡の整理をしながら尋ねると、秋蘭殿は顔色を変えずに私の言葉を遮ってそう答えた。まあ、多い気がすると言っても只の100枚ほどだ。文句を言うほど多くないし、良いや。私はそう思うと、新たな竹簡に手を伸ばして目を通していくのだった

その男、独眼龍ゝ4ゝ（後書き）

感想・質問は随時、受け付けております

次回：猫耳娘登場

その男、独眼龍〜5〜（前書き）

まみむ様、感想ありがとうございます
第5話、更新です

その男、独眼龍く5

あの牛猪暴走事件から数日。華琳殿に仕えていることが知れ渡ったのか、兵士さん達とすれ違うと幾分緊張して挨拶をされるようになった。それは良いのだが、通り過ぎると決まって『龍將軍は今日も綺麗だなあ』とか『ああ、足蹴にされたい』とか呟くのは勘弁してもらいたい

「はあ．．．．．なんだかなあ．．．．．」

日課になりつつある中庭での鍛錬を終えてタオルで汗を拭いていると、ふと女扱いについて考えてしまい、ため息が漏れた。だって、完全に女であると認識されているからね、私．．．．．まあ、華琳殿に『男発言禁止』という命令をさてたから、仕方がないと言えは仕方がない

ポニーテールにした髪も女扱いされる要因かもしれないので切った方が良いと思うが、以前短剣で髪を切ろうとしたら華琳殿以下三名に切るなと言われてしまったため、許可なく切る事ができない。まあ、許可を得たとしても数センチしか切る事ができないんだけどね．．．．．

「さて、今日も一日がんばりますか」

愚痴っても仕方がないので、そう呟いて執務室へ向かった

いつも通り、竹簡を片付けていたら秋蘭殿から、志願者がいるからお前の判断で雇うか決めてほしいと言われたため、志願者が待つ部屋に向かっている。私で大丈夫なのかという不安があるにはあるが、まあ、頼まれたのは仕方がない

そして、志願者がいるという部屋についてドアを開けると、そこには猫耳フードの女の子がいた。恐らく、この子が志願者なのだろう

「えっと、志願してきたのは君かい？」

「………そうだけど、貴女は？」

「ああ、申し遅れたね。私の名は龍だ。よろしく」

「え？ あ、貴女が天の御遣いの………」

「ん？ もう、私のことが広がっているのかい？」

人の噂というものは広がるのが早いもんだな。ふと、女の子の方を見ると、驚いた表情で私をじーっと見つめていた

「どうかしたのかい？」

「い、いいえ、何でもないわ」

「そうか。で、君の名前を覚えてくれるかい？」

「・・・・・・・・荀イクよ」

ほう・・・・・・・・この子が曹魏の名軍師・荀文若か・・・・・・・・

「では、荀イク殿。手始めにこの仕事をしてもらえるかい？」

「ええ」

重要ではないが、早急にまとめなくてはいけないものを荀イク殿に手渡す。荀イク殿はそれを効率良くまとめあげていった

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

まとめあげたものを読んでいく。さすが、荀文若だ・・・・・・・・

見る限り、訂正するところはないな……

「荀イク殿、素晴らしい出来だ。これなら、雇っても大丈夫と判断せざる負えないな」

「ふん、同然よ」

「さて、私は夏侯淵將軍に報告するから、荀イク殿はもうしばらくここで待っていてくれ」

「ええ、分かったわ」

私は荀？殿を雇うことにした旨を伝えるべく、荀？殿を部屋に残して秋蘭殿がいるであろう執務室に向かった

……荀イクSIDE……

「さて、私は夏侯淵將軍に報告するから、荀イク殿はもうしばらくここで待っていてくれ」

「ええ、分かったわ」

私がまとめあげた竹簡を持って龍將軍が部屋を出ていく。一息ついた私はあの龍將軍の事を考えていた。噂で聞いていた天の御使いを私は男だと思っていたけど、あの龍將軍からは男特有の嫌な臭いが全くしなかったし、間違いなく女ね

「でも、あんなに美人とは思わなかったわ。しかも、教養もある
ようだし、天の御使いという名は伊達じゃないみたいね……………」

この後、龍將軍が夏侯淵將軍と戻ってきて、私を監督官にする旨を
伝えにきた。これはチャンスだわ……………この状況を利用し
て曹操さまの軍師になってみせる！

……SIDE END……

「うーん、いつ見ても、壮観だなあ」

城壁の下を走り回るのは、完全武装の兵士さん達。束ねられた槍
は薪のように積み上げられ、その隣には槍束をふたまわり小さくし
た束が、さらに大きな山を築いている。弓兵隊が使う、矢だ

武器に糧食、補充の矢玉。薬に防具に調理の鍋まで、戦に使う備品はその幅広さに事欠かない

そして何より凄いのが、これら全てが私がいた世界では滅多に見ることのできない本物だってことだろう

「どうした、そんな呆けた顔をして」

「……こんなに沢山の兵隊さんをみるのは久しぶりなので、ちよつと感動してね」

昔、ちよつと父親の仕事で自衛隊の基地に入ったことがある。その時に規則正しく並んだ自衛隊員を見て、感動したものだ

「春蘭殿は見慣れてるかもしれないが、私がいた国では、滅多に見れるものではないんでね」

「そうか」

何か言いたげな春蘭殿の方を向いて苦笑をする

「……何を無駄話をしているの、二人とも」

その時、後ろから誰かが声をかけてきたため、振り返ると華琳殿が

ちよつと不機嫌そうに秋蘭殿とこちらに歩いてきていた

「か・・・・・・・・つ、華琳さま・・・・・・・・！　これは、龍が！」

やれやれ、話し掛けてきたのは春蘭殿の方でしょ・・・・・・・・まあ、良いけど・・・・・・・・

「はあ・・・・・・・・春蘭。　装備品と兵の確認の最終報告、受けてないわよ。　数はちゃんと揃っているの？」

「は・・・・・・・・はいつ。　全て滞りなくすんでおります！　龍に声をかけられたため、報告が遅れました！」

あ、そうだ。　私も帳簿を渡すんだったよ。　外の風景に感動して忘れてた

「・・・・・・・・その政也には、糧食の最終点検の帳簿を受け取ってくるよう、言っておいたはずよね？」

「はい、これです」

持っていた帳簿を手渡す。　一通り読んでみたが、なかなか苟イク殿も面白いことをする。　さて、華琳殿はどうするかな？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

黙々と確認していく華琳殿。その度に華琳殿の表情が険しいものになっていき、遂には怒っている表情になった

「・・・・・・・・秋蘭」

「はっ」

「この監督官というのは、一体何者なのかしら？」

「はい。先日、志願してきた新人です。仕事の手際が良かったので、政也と相談して今回の食料調達を任せてみたのですが・・・・・・何か問題でも？」

「ここに呼びなさい。大至急よ」

「はっ！」

華琳殿の命令により、秋蘭殿は監督官の荀イク殿のところに向かった

「・・・・・・・・・・・・・・・・遅いわね」

「遅いですなあ・・・・・・・・」

「もうすぐですよ」

雲の動きや太陽の位置を見るに、まだ大して時間は経っていない。

華琳殿は相当頭にきてる感じだな、空気が重いし。まあ、理由は分かってるんだけどね

「華琳さま。連れて参りました」

「おまえが食料の調達を？」

「はい。必要十分な量は、用意したつもりですが・・・・・・・・何か問題でもありましたでしょうか？」

「必要十分って・・・・・・・・どういつつもりかしら？ 指定した量の半分しか準備できていないじゃない！」

そう、あの帳簿には華琳殿が指定した量の半分しか記載されていないのだ。恐らく、荀イク殿の策だろうから、ここは見守っておこう

「このまま出撃したら、糧食不足で行き倒れになる所だったわ。そっとなったら、あなたはどう責任をとるつもりかしら？」

「いえ。　そっはならないはずです」

「何………どういうこと？」

「理由は三つあります。　お聞きいただけますか？」

「………説明なさい。　納得のいく理由なら、許してあげても良いでしょう」

華琳殿は納得いかなかったら、斬るつもりのようだ。　多分、大丈夫だろうと思うけど、止める準備はしておこう

「………ご納得いただければ、それは私の不能がいたすところ。　この場で我が首、刎ねていただいても結構にございます」

「………一言はないぞ？」

「はっ。　では、説明させていただきますが………」

荀イク殿はそこで話を句切ると、華琳殿を真正面から見据える

「…………まず一つ目。曹操さまは慎重なお方ゆえ、必ずご自分の目で糧食の最終確認をなさいます。そこで問題があれば、こうして責任者を呼ぶはず。行き倒れにはなりません」

「ば…………っ！ 馬鹿にしているの！？ 春蘭！」

「はっ！（ガシッ） 龍！？」

春蘭殿が大剣を抜く前に止めに入る。 ここで首を刎ねられては困るからね

「華琳殿、冷静に。 理由は後二つあります。 判断は、それを聞いてからでも遅くはありませんよ」

「龍の言う通りかと。 それに華琳さま、先ほどのお約束は……………」

「……………そうだったわね。 で、次は何？」

華琳殿が聞く体制に戻ったので、春蘭殿の腕を放す

「次に二つ目。 糧食が少なければ身軽になり、輸送部隊の行軍速度も上がります。 よって、討伐行全体にかかる時間は、大幅に短縮できるでしょう」

「ん……………？ なぁ、秋蘭」

「どうした姉者。 そんな難しい顔して」

「行軍速度が早くなっても、移動する時間が短くなるだけではないのか？ 討伐にかかる時間までは半分にはならない……. よな？」

「ならないぞ」

「良かった。 私の頭が悪くなったのかと思ったぞ」

「そうか。 良かったな、姉者」

「うむ」

そう。 春蘭殿の言う通り、移動だけじゃなく戦闘も、休憩の時間も必要だ。 また、食料がちょっと軽くなった程度で、移動速度は倍になるわけではない。 さて、このことを荀イク殿はどう説明するのか？

「まあ、良いわ。 最後の理由、言ってみなさい」

「はっ。 三つ目ですが……. 私の提案する作戦を採れば、戦闘時間はさらに短くなるでしょう。 よって、この糧食の量で十分だと判断しました」

荀イク殿はそう言うと、華琳殿を見つめて

「曹操さま！　どうかこの荀イクめを、曹操さまを勝利に導く軍師として、貴下にお加えくださいませ！」

と言い放つ。　　はは、そうくるか、荀イク殿・・・・・・・・！

「な・・・・・・・・っ!？」

「何と・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「どうか！　どうか！　曹操さま！」

華琳殿はどう裁くかな？

「・・・・・・・・荀イク。　貴女の真名は？」

「桂花でございます」

「桂花。　貴女・・・・・・・・この曹操を試したわね？」

「はい」

お、度胸があるなあ

「な．．．．．っ！ 貴様、何をいけしゃあしゃあと．．．．．
華琳さま！ このような無礼な輩、即刻首を刎ねてしましましょう
！」

「貴女は黙っていなさい！ 私の運命を決めていいのは、曹操さま
だけよ！」

「ぐ．．．．．っ！ 貴様あ．．．．．！」

「春蘭殿、落ち着きなさい。 荀イク殿の言う通り、これは華琳殿
との約束だ。 私たちがとかく言うことではない」

「ぐうう．．．．．」

春蘭殿は納得がいかない表情をしながらも姿勢を正す。 私はそれ
を確認し、視線を華琳殿と荀イク殿に戻した

「桂花。 軍師としての経験は？」

「はっ。 ここに来るまでは、南皮で軍師をしていました」

「．．．．．そう」

南皮というと、この時代は袁紹の本拠地だったな。 ふむふむ、華

琳殿の様子を見るかぎり、袁紹とは知り合いのようだ

「どうせあれのことだから、軍師の言葉など聞きはしなかったのでしょう。それに嫌気が差して、この辺りまで流れてきたのかしら？」

「・・・・・・・・まさか。聞かぬ相手に説くことは、軍師の腕の見せ所。まして仕える主が天を取る器であるならば、そのために己が力を振るうこと、何を惜しみ、躊躇いましょうや」

「・・・・・・・・ならばその力、私のために振るうことは惜しまないと？」

「一目見た瞬間、私の全てを捧げるお方と確信いたしました。もしご不要とあれば、この荀イク、生きてこの場を去る気はありません。遠慮なく、この場でお切り捨て下さいませ！」

荀イク殿はそう言い切ると、華琳殿を見据えて立つ。その潔さは感服する

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「華琳さま・・・・・・・・」

「春蘭」

「はっ」

「華琳さま・・・・・・・・つ！」

おや、華琳殿の顔が笑顔だな。　これは・・・・・・・・

「桂花。　私がこの世で尤も腹正しく思うこと。　それは他人に試されること・・・・・・・・分かっていくかしら」

「はっ。　そこをあえて試させていただきました」

華琳殿が春蘭殿から受け取った大鎌を突き付ける中、荀イク殿は恐れもせず、淡々と告げる

「そう・・・・・・・・ならば、こうすることも貴女の手の平のうえと
いうことよね・・・・・・・・」

そう言うなり、華琳殿は振り上げた刃を一気に振り下ろす

「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（ふっ）」

華琳殿には全く殺すきがないと分かっていたから、思わず笑みがこぼれてしまった

華琳殿が振り下ろされた大鎌は微動だにしなかった荀イク殿の首筋に寸止めされていた。そして、退いた刃の先に荀イク殿の淡い色の髪の毛が絡んでいる

華琳殿は笑みを浮かべながら荀イク殿を見据えた

「……………桂花。もし私が本当に振り下ろしていたら、どうするつもりだった？」

「それが天命と、受け入れておりました。天を取る器に看取られるなら、それを誇りこそすれ、恨むことなどございませぬ」

「……………嘘は嫌いよ。本当のことを言いなさい」

「曹操さまのご気性からして、試されたなら、必ず試し返すに違いないと思いましたので。避ける気など毛頭ありませんでした。それに私は後ろに控える御三方のような武官ではありません。あの状態から曹操さまの一撃を防ぐ術は、そもそもありませんでした」

「そう……………」

小さく呟いた華琳殿は荀イク殿に突き付けていた大鎌をゆつくりと下ろす。ふっ、これで荀イク殿の軍師入りは内定済みかな

「……………ふふっ。あははははははっ！」

「か、華琳さま……………っ!？」

「最高よ、桂花。私を二度も試す度胸とその知謀、気に入ったわ。貴女の才、私が天下を取るために存分に使わせてもらうことにする。良いわね？」

「はっ！」

「ならまず、この討伐行を成功させてみせなさい。糧食は半分で良いと言ったのだから……もし不足したならその失態、身をもって償ってもらわうよ？」

「御意！」

おや？ 華琳殿のその『身をもって償ってもらう』というニュアンスがどうも引つかかるなあ。切り捨てるといふより……

「ん？ どうかしたか、龍」

「いや、何でもないよ。私は自分の仕度をしてくる」

「ああ、早くこいよ」

「分かってるさ」

私は身支度を整えるため、自分の部屋へと向かった。さて、私にとって初めての討伐だ……。どうなるか分からないが……。気を引き締めてかからないとな……

その男、独眼龍ゝ5ゝ（後書き）

感想・質問は随時、受け付けておりますので、送ってくださいと嬉しいです

次回：天真爛漫娘登場

その男、独眼龍〜6〜（前書き）

第六話、更新しました

読んで下さる方が楽しんでいただけたら幸いです。では、本編を
どうぞ

その男、独眼龍く6

私たちは最終確認を終え、出撃を開始した

私の姿は、腰に白狐を提げて制服の下には簡易の帷子を着ている。

ちなみにこの帷子は牛猪事件の時、奥様方からもらったお礼で作ったもので、防御力は低い

まあ。ないよりはあった方が良くからね。

「龍、大丈夫か？」

隣で並行している秋蘭殿が声をかけてきたため、大丈夫と返事をする

今まで馬に乗る機会がなかったため、乗れるか心配だったけど、初めてなりに上手く乗れているから一安心だ

まあ、乗馬しながらの攻撃は別の問題だけど……………

「それにしても……………凄く面白いことになったなあ」

「龍……………」

「あつ、すまない」

秋蘭殿が顔をしかめたため素直に謝り、直ぐに緩んだ顔を引き締めたが、あの荀イクや曹操の手腕をこの目に見ることができると考えると、顔が緩んできてしまうのは仕方がないことだろう

「・・・・・・・・・・・・・・・・（ジー）」

「ん？ 佳花殿、何かご用か？」

「（ビクッ）いえ、何でもないわ」

佳花殿がじーっと私を見つめていたので何か用かと尋ねると、肩を僅かに動かしてそう返事をする

ふう、やはり私のような若輩者に真名を言われるのは嫌みたいだな。私や秋蘭殿は、華琳殿から佳花殿のことを真名で呼ぶように言われているから、顔にださないようにしているけどね

まあ、佳花殿に認められるようにがんばるしかないな

「・・・・・・・・しかし、佳花。あのやり取りは肝が冷えたぞ」

「仕方がないじゃない。軍師の募集なんてしてなかったんだから」

「はは、そうだね。軍師になりたいと思っていたのなら尚更だ」

まあ、経歴を偽って申告する輩も多いみたいだし。文官はよほど名の通った輩でない限り、使ってみないと判断がつかないのは当然だ

「……………うむ。それもそうだな」

「そうよ。だから、一刻も早く曹操さまの目に留まる働きをして、召し上げていただこうと思ったのだけれど……………その機が思ったより早くきて良かったわ」

だから、ああいう強攻策にでたってわけだ

「で、華琳さまはどうだったのだ？」

「思った通り、素晴らしいお片だったわ……………あのお方こそ、私が命を懸けてお仕えするに相応しいお方だわ！」

佳花殿は乗馬しながら、頬に両手を置いて恍惚の表情をしている。
華琳殿の尊敬度が相当なものであると推測できる。佳花殿にと
って華琳殿は崇高なるお方みたいだな

「おお、貴様ら、こんな所にいたか」

「どうした、姉者。急ぎか？」

「うむ。前方に何やら大人数の集団がいるらしい。華琳さまが

お呼びだ。直ぐにこい」

「分かったわ！」

「うむ」

「私も？」

「何当たり前のことを言っているのだ、お前は？ 龍もこい」

私は苦笑しながら了解し、三人と一緒に華琳殿の元へと急いだ

「・・・・・・・・遅くなりました」

「丁度、偵察が帰ってきたところよ。報告を」

「はっ！ 行軍中の前方集団は、数十人ほど。旗がないため所属は不明ですが、格好がまちまちなところから、どこかの野盗か山賊だと思われます」

「・・・・・・・・様子を見るべきかしら」

「もう一度、偵察隊をだしましょう。夏侯惇、龍、貴女たちが指揮を執って」

「おう」

「了解した。春蘭殿の抑え役は任してもらいましょう」

「おい、ちょっと待て！ それではまるで、わたしが敵と見ればすぐ突撃するようではないか！」

「違うの？」

「違わないでしょう？」

「うっ、華琳さままでえ・・・・・・・・」

少し落ち込む春蘭殿を見ると可哀相だが、まあ日頃が日頃だ。仕方がないことと諦めてほしいものだな 仕

「私もでると、こちらが手薄になりすぎる。それにもし戦闘になった場合も姉者と龍の方が適任・・・・・・・・そういう判断だな、佳花」

「そうよ。龍の实力は知らないけれどね」

今まで私と戦ったことがあるのは、華琳殿、春蘭殿、秋蘭殿と一部の兵士さんだけだ。まあ、私の実力なんてたかが知れてるけどね

「行ってくれるでしょう？ 政也。 春蘭」

「はっ！ 承知いたしましたー！」

「了解しました」

「では春蘭、政也。 すぐに出撃なさい」

私と春蘭殿は華琳殿の命により、春蘭殿の隊をまるまる偵察部隊に割り振り、本隊から離れて移動を始めた

「全く。 先行部隊の指揮など、わたし一人で十分だというのに・・・」

移動開始直後、春蘭殿がそう愚痴をこぼす

「偵察も兼ねているのだから、通りすがりの傭兵隊とかだったら、突っ込んでダメだよ？」

「言われるまでもないわ。 そこまでわたしも迂闊ではないぞ」

「（やれやれ。その迂闊が有り得るから私がつけられたワケなんだけど……）」

私は肩を竦めながら苦笑する。しかし、春蘭殿の性格を正確に判断して私をつけるとは、流石は名軍師・荀イクだなあ

そう思っていると、一人の兵士さんが近づいてきた

「夏侯惇さま！ 見えました！」

「」苦勞！」

向こうの集団は行軍してるって言う感じではなく、一力所に集まってる何やら騒いでいるように見える

見えるとは言っても、酒盛りのような雰囲気ではない

「何かと戦っているようだね」

「そうだな」

その時、人だかりの一部が高く打ち上げられた

「（へえ）。人って、あんなに飛ぶもんなんだな。大発見だ）」

「何だ、あれは!？」

しかし、春蘭殿の驚きを見るにあの情景は滅多にないものみたいだ

一体、誰があんなに人を飛ばしてるんだ？ ん？ あれは……………

・

「誰かが戦っているようです！ その数……………一人！ それも子供の様子！」

「何だと!？」

その報告を聞くが早いか、春蘭殿は馬に鞭を振り、一気に加速させていく

「ふう。止める暇がなかったな……………誰がいるかい！」

「はっ！」

「このことを華琳殿たちに報告！ それと何人かはあの者たちが退却したときに追跡をしなさい！ 春蘭殿は私が止める！ 良いね！」

「……………はっ!」「……………」

私は兵士さん達に指示をだした後、春蘭殿を追っていった。そし

て春蘭殿の後ろ姿を確認した私は馬から飛び降り、加速しながら野盗の一人の後頭部に飛び蹴りをかます

「よっ！」

その相手を踏み台にして春蘭殿と子どもとところへと降り立つ

私が駆けつけた時には既に春蘭殿が大抵の野盗たちを倒しており、子どもの安全を確かめた春蘭殿が野盗たちを睨みつける

「貴様らあつ！ 子供一人によつてたかつて……卑怯というにも生温いわ！ てやあああああつ！」

「うわぁ……っ！ 退却！ 退却——っ！」

野盗の一人がそう叫ぶと、それに呼応するかのように全員も撤退していった

しかし、ここからが私の出番だ。 春蘭殿の性格からして

「逃がすか！ 全員、叩き斬ってくれるわ！！！」

こうなるよね、やっぱり。 たく、自分の任務を忘れてちゃ世話ないよ

「春蘭殿！ ちょっと待ちなさい！」

「龍、何故止める！」

「私たちの仕事はあくまでも偵察だよ。 その子を手助けするために戦うのはいいとして、敵を全滅させることが目的ではないでしょ」

「ふんつ。 敵の戦力を削って何が悪い！」

「やれやれ。 私を威圧しても意味がないよ」

「それも尤もだけど、今はあの野盗たちにを追跡して敵の本拠地を掴んだ方がいい」

「おお、それは良い考えだな。 誰か、おおい、誰かおらんか！」

「もう何人が偵察に出しといたよ」

「うむ、そうか……」

これが魏の最強戦力か

武勇の方は確かに無敵だけど、この猪突猛進は何とかしてほしいなあ。
まあ、これが春蘭殿なのだろう

「あ、あの……」

「おお、怪我はないか？ 少女よ」

「はいっ。 ありがとうございます！ おかげで助かりました！」

「うむ。 それは何よりだ」

うん、良い子だ。 しかも、その小柄で大の大人を軽々とあんな高く飛ばす力があるとは凄いなあ。 けど……

「何故こんなところで一人で戦っていたんだい？」

「はい、それは……」

少女がそんな話をしようとすると、向こうから本隊がやってきた

その本隊を見つめた少女は何だか訝しげな表情をした。 どうしたのだろう？

「政也。 謎の集団とやらはどうしたの？ 戦闘があったという報告はきいたけれど……」

「やつこさん達は春蘭殿の勢いに負けて逃げて行きましたよ。 何人かに尾行してもらってるので、本拠地はすぐ見つかると思いますよ」

「そう。 ん？ この子は？」

華琳殿は頷くと、こっちを見つめる少女に気がつく。 少女は華琳殿の問いには答えず、春蘭殿の方を見つめて

「お姉さん、もしかして、国の軍隊……っ!？」

「まあ、そうn (春蘭殿!) うおっ!？」

春蘭殿目掛けて得物(巨大な鉄球)で攻撃をしてきたため、咄嗟に春蘭殿と少女の間に身体を入れて、白狐を真横に構えて防御する

【ドン!】

く……っ! 何て重い一撃を放つんだ……! 白狐みたいな刀ではなかったら防げないほどだぞ……!

しかし、何故いきなり攻撃をしてきたんだ……?

「き、貴様、何をっ!」

「国の軍隊なんか信用できるもんか! ボク達を守ってもくれないクセに税金ばかり持って行って!」

春蘭殿の問いにそう答えた少女はもう一度、鉄球を振りかざし

「てやあああああっ！」

という掛け声と共に私に向かって攻撃をしてくる

「龍！」

白狐で防ぎながら春蘭殿に大丈夫という意味で笑顔を見せると、少女を見据えて口を開く

「……………だから、君は一人で戦っていたのかい……………
？」

「そうだよ！　ボクが村で一番強いから、ボクがみんなを守らなきゃいけないんだっ！　盗人からも、おまえたち……………役人からもっ！」

「（そうか。　この一撃の重さは力だけではなさそうだな）」

少女の一撃の重さは皆を守りたいという気持ちも加わっているのだろっ

しかし、華琳殿がそんな悪いことをするわけではない。　街を見ても

全然酷い感じではなかったはずだし、外の街でも重税を掛けているわけではないはずだ

そう言えば、ここら辺は華琳殿が治めている地域ではなかったはずだ。そういうことか・・・少女は華琳殿が官であるということ自分で自分たちを苦しめている者の仲間だと思っただろう

【ドン！】

く・・・！ 流石に受け流すのがやっとになってきたな、少しやばいぞ・・・

「二人とも、そこまでよ！」

「え・・・っ？」

私が少し冷や汗を流しながら少女の攻撃を受け流していると、華琳殿の静止命令が届いた

「剣を引きなさい！ その娘も、政也も！」

「は・・・はいっ！」

その場に歩いてくる華琳殿の気迫にあてられ、女の子は軽々と振り回していた鉄球を、その場に取り落とした。それを確認した私は白狐を鞘に納めて少女に近づいて行く華琳殿を見つめる

「・・・・・・・・政也、春蘭。この子の名は？」

「え、あ・・・・・・・・」

「き・・・・・・・・許緒と言います」

こついう威圧感のある相手を前にするのは初めてみたいだな。許緒と名乗った少女は、完全に華琳殿の空気に吞まれきっている

というか、この子が許緒か・・・・・・・・どうりで力持ちのはずだ

「そう・・・・・・・・」

許緒の名を訊いた華琳殿が取った行動は・・・・・・・・

「許緒、ごめんなさい」

「・・・・・・・・え？」

許緒に頭を下げることだった

「曹操、さま・・・・・・・・？」

「何と・・・・・・・・」

「あ、あの・・・・・・・・っ！」

その行動にその場にいた誰もが呆気に取られている

「名乗るのが遅れたわね。私は曹操、山向こうの陳留の街で、刺史をしている者よ」

「山向こうの・・・・・・・・？ あ・・・・・・・・それじゃっ！？ ごめんなさいっ！」

どうやら、自分が勘違いをしていたことに気付いたらしい

「山向こうの街の噂は聞いてます！ 向こうの刺史さまは凄く立派な人で、悪いことはしないし、税金も安くなっだし、盗賊も凄く少なくなったって！ そんな人に、ボク・・・・・・・・ボク・・・・・・・・」

「構わないわ。今の国が腐敗しているのは、刺史の私が一番よく知っているもの。官と聞いて許緒が憤るのも、当たり前の話だわ」

「で、でも・・・・・・・・」

話を聞いていて分かったことは、華琳殿ところは治安が良くなってきたけれど、他はまだまだらしいということだ

まあ、後漢末期という時代だ。腐敗していてもおかしくはない

「だから許緒。貴女の勇気と力、この曹操に貸してくれないかしら？」

「え．．．．．？　ボクの、力を．．．．．？」

「私はいずれこの大陸の王となる。けれど、今の私の力はあまりに少なすぎるわ。だから．．．．．村の皆を守るために振るった貴女の力と勇気。この私に貸してほしい」

「曹操さまが、王に．．．．．？」

「ええ」

「あ．．．．．あの．．．．．曹操さまが王様になったら．．．．．ボク達の村も守ってくれますか？　盗賊も、やつつけてくれますか？」

「約束するわ陳留だけでなく、貴女たちの村だけでなく．．．．．この大陸の皆がそうして暮らせるようになるために、私はこの大陸の王になるの」

「この大陸の．．．．．みんなが．．．．．」

ふつ。 流石は曹孟徳殿だ。 この人ならば必ず大陸の王となるだろう。 私は華琳殿が歩むであろう道を思い浮かべる

自分がきたのは、華琳殿を大陸の王にするためだと、少しだけだがそう思えてきた。 だから、ここで宣言しよう

私、龍政也は華琳殿に忠誠を誓いましょう

と、気持ちを新たにしていると、偵察に出していた兵士さんが帰ってくるのが見えた

「曹操さま、偵察の兵が戻りました！ 盗賊団の本拠地は、直ぐそこです！」

「判ったわ………ねえ、許緒」

「は、はいっ！」

「まず、貴女の村を脅かす盗賊団を根絶やしにするわ。 まずそこだけでいい、貴女の力を貸してくれるかしら？」

「はい！ それなら、いくらでも！」

「ふふつ、ありがとう………政也。 許緒は一先ず、貴女の下に付ける。 分からないことは教えてあげなさい」

「了解しました」

私はそう返事をする、許緒の方を見据える。許緒は私の方を振り返ると何やら言い難そうにしながらも話しかけてきた

「あ、あの……龍、さま……」

「ん？ ああ。さっきのことなら気にしないで良いよ。あと、さま付けはやめてほしい。私はそんなに偉くはないからね」

「じゃ、じゃあ……お姉ちゃん……」

「ははは、それでも構わないよ」

「うん！」

ま、まあ。希望としては『お兄ちゃん』が良かったけど、贅沢は言わないよ

私はそう思いながらも笑顔で許緒の頭を撫でる。許緒は気持ちよさそうに目を細めながら、無邪気な笑顔を返してくれた。やっぱり子どもは笑っていてくれるのが一番良いなあ

「……では総員、行軍を再開するわ！ 騎乗！」

「総員！ 騎乗！ 騎乗っ！」

華琳殿と秋蘭殿のかけ声で兵士さん達が一斉に馬に騎乗し、行軍を

再開した。目的地は偵察部隊の報告にあつた盗賊団の本拠地（隠れ家）だ。ふう……ここからは気を引き締めて行くぞ。私の最初の戦いなのだから……

その男、独眼龍ゝ6ゝ（後書き）

許緒にも女性扱いを受ける政也。
れるのでしょうか……

政也が男だと理解される日は訪

次回：盗賊団との戦い

その男、独眼龍くろく（前書き）

第七話、更新しました

読んでくれたら幸いです。では、本編をどうぞ

その男、独眼龍くっ

……龍隊兵士SIDE……

龍さまと夏侯惇さまが助けた少女（許緒殿と仰られる）を一時的に加えた我らは、村を襲う盗賊団を根絶やしにするため、その本拠地に向かっている

我らは曹操さまを守るように配置され、夏侯惇さまは前線に、夏侯淵さまはその後方で行軍の指揮を執っている。そして、我らの将・龍さまはというと……

「うむ。やはり、自分の足で歩かないと、気づかないな」

我ら歩兵と一緒に行軍していた。しかも、許緒殿が乗馬できると知ると、自分の馬をお貸しになって自分は歩いているのだ

そして時々、道に生えている雑草を摘んでいる。それは龍さまにとっては大事なことなのだろうから気にはしない、気にはしないが・
・・・・

「あの、龍將軍・……」

「ん？ 何だい？」

「何故、歩いておられるのですか？」

どうして、我らと一緒に歩いているのかが分からない

龍さまは私の問いに対して微笑みを返され

「気にしたら負けだよ、君」

「は、はあ………」

と誤魔化されてしまう。 けど、気にするなと言われても無理な話である

龍さまは、一介の兵士に過ぎない私にとって雲の上のお方だ。 それに龍さまは天の御遣い様で、曹操さまや夏侯惇さま、夏侯淵さまが一目置かれる方でもある

我らと一緒に歩いて行軍するお方ではないのだ

「ねえ、お姉ちゃん」

「ん？ どうかしたのかい？」

そんな事を考えていると、許緒殿が顔を龍さまに近づけて話し掛けてきた

「さっきから道の草を採ってるけど、どうして？」

「ははは、気にしたら負けだよ、許緒」

私の時と同様に、そう言って誤魔化される龍さま

「ふん、そつか。じゃ、ボク気にしない」

「そうそう。許緒は素直だね」

「えへへへ」

許緒殿が笑顔でそう返すと、龍さまは許緒殿の頭を撫でられた。
許緒殿は目を細めて嬉しそうにしている

「……何というか、本当の姉妹に見える状況である

「曹操さまからの伝令です。敵の本拠地と思われる砦を確認。
直ちにこちらに来るようにと」

「分かった。直ぐに行くと伝えてくれ」

「はっ！」

そうこうしている内に、盗賊団の本拠地と思われる砦が見つかったらしい。その報告を受けた龍さまは馬に跨がると、許緒殿と一緒に向かわれた

ちらつと見えた龍さまの横顔は、さっきまでのお優しい表情ではなく、凛々しく格好良い表情になっておられた

私はそれで、いよいよ戦いになると認識したのだった

……SIDE END……

華琳殿の下へ戻ると、ちょうど春蘭殿が報告しているところだった。春蘭殿の話では、盗賊団の本拠地（隠れ家）の砦は、山の陰に隠れるようなひっそりと建てられているという事らしい

「そう言えば許緒、この辺りに他の盗賊団はいるのかい？」

「ううん。この辺りにはアイツらしかいないから、お姉ちゃん達が探している盗賊団っていうのも、アイツらだと思うよ」

なるほど。恐らく、ここいらの無法者たちが一つの盗賊団を作ったのだろう

「敵の数は把握できている？」

「はい。およそ三千との報告がありました」

三千か．．．．．私たちの隊が千とちょっとだから、約三倍．．．

「思ったより、大人数だな。 龍」

「そうだね」

春蘭殿の呟きに頷くと、桂花殿を見つめる

「もつとも連中は、集まっているだけの烏合の衆。 統率もなく、訓練もされておりませんゆえ．．．．．我々の敵ではありません」

「けれど、策はあるのでしょうか？ 糧食の件、忘れてはいないわよ」

「無論です。 兵を損なわず、より戦闘時間を短縮させるための策、既に私の胸の内に」

桂花殿は自信に漲った表情をしている。 いよいよ、あの荀イクの策が分かるぞ

そう思うと何だか楽しみだ。 おっと、思わず顔がニヤけてしまうところだった。 ふう．．．．．ここはニヤける場面ではない。 気を引き締めてっと．．．．．

ニヤける顔を何とか表に出さないように抑えながら、桂花殿の説明を聴く

「まず曹操さまは少数の兵を率い、砦の正面に展開してください。
その間に夏侯惇・夏侯淵の両名は、残りの兵を率いて後方の崖に待機」

華琳殿に少数の兵を率いて砦の正面に展開させ、春蘭殿と秋蘭殿に後方の崖に待機させるか……これはなかなか……
流石は荀イクだな……

「本隊が銅鑼を鳴らし、盛大に攻撃の準備を匂わせれば、その誘いに乗った敵はかならずや外に出てくる事でしょう。その後は曹操さまは兵を退き、十分に砦から引き離れたところで……」

「私と姉者で、敵を背後から叩くわけか」

「ええ」

桂花殿の話を引き継いで、秋蘭殿が口を開く。桂花殿はそれに頷くと、真つすぐ華琳殿を見据えた。すると、今まで黙っていた春蘭殿が

「ちょっと待て。それは何か？ 華琳さまに囿をしろと、そう言うわけか！」

と桂花殿に怒鳴った。桂花殿は『何か問題でも?』と言いながら、華琳殿の後ろに控える春蘭殿を見据えた

「大ありだ! 華琳さまにそんな危険な事をさせるわけにはいかん!」

「なら、あなたには他に何か有効な作戦があるとでも言っの?」

「烏合の衆なら、正面から叩き潰せば良からう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ふっ・・・・・・・・春蘭殿らしい意見だ。まあ、他の皆はその言葉に呆れてるけどね。さて、ここは・・・・・・・・

「春蘭殿。糧食の件もあるし、我々にとって貴重な兵の損失を最小限にするのなら、桂花殿の策が一番良いんと私は思うよ」

「なっ!? 龍までそのような事を!?」

「良いかい? 油断したところに伏兵が現れたとする。当然、相手は大きく混乱する。混乱した烏合の衆はより倒しやすくなるはずだよ」

春蘭殿に桂花殿の策が如何に良いか説明をする。すると、春蘭殿は最後の悪あがきで

「な、なら、その誘いに乗らなければ？」

「・・・・・・・・ふっ」

と言うが、桂花殿は鼻で笑う

「な、何だ！ その馬鹿にしたような・・・・・・・・っ！」

その態度が気に入らなかったのか、春蘭殿は怒鳴り散らす、桂花殿はそれを無視して華琳殿の方に視線を戻すと

「曹操さま。相手は志も持たず、武を役立てることもせず、盗賊に身をやつすような単純な連中です。間違いなく、夏侯惇よりも容易く挑発に乗ってくるものと・・・・・・・・」

と告げた

あははは。これは単に春蘭殿が単純と言ってるようなものだなあ・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・な、ななな・・・・・・・・何だとおー！」

「はい、どうどう。春蘭。あなたの負けよ」

「か、華琳さまぁ・・・・・・・・」

春蘭殿が爆発しそうなのを華琳殿が宥める。華琳殿はしおらしくなった春蘭殿に微笑むと、桂花殿の方を向き直る

「・・・・・・・・・・・・・・・・とは言え、春蘭の心配も尤もよ。次善の策はあるのでしょうかね」

「この近辺で拠点になりそうな城の見取り図は、既に揃えてあります。あの城の見取り図も確認済みですので・・・・・・・・万が一、こちらの誘いに乗らなかった場合は城を内から攻め落とします」

ほう。流石は桂花殿。色々な場面を想定し、それに応じた策を巡らしているとは。ふっ。これでは春蘭殿も納得せざるおえない

「・・・・・・・・龍」

「何だい？」

春蘭殿に視線を向けると、押し黙っていた春蘭殿がこちらを向き、

私の名を呼ぶ

「華琳さまを必ずお守りするのだぞ。　良いな？」

「ああ、分かつてる。　では桂花殿。　囃部隊は華琳殿と私、伏兵は春蘭殿と秋蘭殿が指揮するでよろしいかな？」

春蘭殿の頼みに頷いた私は桂花殿に最終確認を行う。　私も伏兵ということでも良いが、春蘭殿に頼まれてしまったから、こついう形にした

「・・・・・・ええ。　曹操さま、どうでしょうか？」

「それで行きましょう」

桂花殿は一瞬思考して頷くと、華琳殿に視線を向ける。　華琳殿はそう言って微笑むと

「では、作戦を開始する！　各員持ち場につけ！」

力強い声で兵に指示を出していった

春蘭殿たちの隊が離れていく。 これで、こちらの手勢は本隊と龍隊の数えるほどしかない

いよいよ。 作戦開始だ。 正直、少し自分がどうなるのか分からないけど、まあ大丈夫だろう。 そう思いながら自分の隊を眺める

「お姉ちゃん。 どうしたの？」

「ん？ いや、何でもない。 許緒の方は大丈夫かい？」

「うん、大丈夫！ あ、そうだ。 お姉ちゃん」

「何だい？」

許緒は私の問いに大きく頷くと、何かを思い出したのか笑顔でこつちを見つめる

「ボクの真名は季衣だよ。 季衣って呼んで」

「良いのかい？」

「うん！ 春蘭さまも秋蘭さまも、真名で呼んでいいって言ってくれたし」

あらら、いつの間に……

「あはは、そうか。 なら、季衣。 私と一緒に華琳殿の護衛をしっかりと務めよう」

「うん。 たいやく、なんだよね？」

「ああ、物凄く大役だぞ。 何せ、華琳殿を守る仕事だからね」

「うう、何か、緊張してきちゃった……」

「ははは、そう気張らなくてもいい。 季衣は充分に強い。 村の皆のために頑張れば良いんだ」

「うん！」

私はそう自分に言い聞かせる意味でそう口にする

片目と言う以外、何も不自由なく平和に過ごしてきた自分にとって、この戦は相当辛いものとなるだろう。 けど、こんな小さな子も戦っているんだ。 二十歳の私がこんな弱音を表にだしてはいけない。 それに、仮にも私は華琳殿の配下の武官だ。 ここで頑張らなけ

れば、どこで頑張るといふのだ

「大陸の王つてよく分かんないけど……曹操さまがボク達の街も、陳留みたいな平和な街にしてくれるって事なんだったら、それってきつと良いことなんだよね？」

「ああ」

そう言った季衣は表情を引き締める

それを見ながら私は、親父が言っていた『殺す覚悟』と『殺される覚悟』の事を考えていた。この戦で身に付けられるか分からないが、戦いの中で見出さないといけない……

「その二人、早く来なさい！ 作戦が始まんでしょ！」

「おっと、どうやら軍師殿がご立腹のようだ。季衣、これは急いで向かった方が良さそうだぞ？」

「うん！」

なかなか集まらない私たちに桂花殿が怒鳴ってきた。私は苦笑しながら季衣とともに桂花殿の下へと向かった

響き・・・・・・・・

『『『『『うおおおおおおおっ！！』』』』』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・響き渡る銅鑼の音は、こちらの軍のもの。でも、響き渡る咆哮は、城門を開けて飛び出してきた盗賊達のもの

「・・・・・・・・桂花」

「はい」

「これも作戦のうちかしら？」

「いえ・・・・・・・・これは流石に想定外でした・・・・・・・・」

その様子に少しばかり呆気にとられる華琳殿と桂花殿。もちろん、私もだ

「連中、今の銅鑼を出撃の合図と勘違いしているのかしら？」

「はあ。どつやら、そのようで・・・・・・・・」

「・・・・・・・・そう」

華琳殿はそう呟くと不服そうな表情をする。恐らく、挑戦の言葉でも考えてあったのだろう。まあ、それは次の機会までとっておいてもらう事にしよう

そう考えていると、軍隊の様子を見ていた季衣が

「曹操さま！ お姉ちゃん！ 敵の軍勢、突っ込んできたよっ！！」

と叫んだため、視線を軍勢の方に戻す

おお、凄い人数だ。 いや、こつも馬鹿正直に全軍で出撃してくるとはねえ」

「ふむ……まあ良いわ。 多少のズレはあったけれど、こちらは予定通りにするまで。 総員、敵の攻撃を適当にいなしつつ、後退するわよ！」

まずは作戦通りだ。 これで春蘭殿と秋蘭殿のもとまで後退すれば良い

私は華琳殿と佳花殿を守りつつ後退していった

……… 第三者SIDE ……

「報告！ 曹操さまの本隊及び龍將軍の部隊、後退してきました」

「やけに早いな……ま、まさか……華琳さまの御身に何か……？」

「心配すぎだ、姉者。 龍がそう容易く華琳さまに敵を近づけさせるわけがなからう」

「……う、うむ」

「見る限り、隊列は崩れていない。 恐らく、相手が血気に逸ったか、作戦が予想以上に上手くいったか……そういうところだろう」

「そうか……ならば総員、突撃準備！」

春蘭の指示で動き出す兵士たち。 その時、後退してきた本隊が春蘭たちの方へと近づいてきました

「ほら姉者。 あそこに華琳さまは健在だ。 季衣も龍も、ちゃんと無事のようだぞ」

「おお……良かった……」

華琳、季衣、政也、桂花の無事な姿を確認した春蘭は安堵の表情になります。 そして、華琳たちが通り過ぎた数十秒後に敵が群れを

なして現れました

「・・・・・・・・これが盗賊団とやらか」

「隊列も何もあつたものではないな」

「ただの暴徒の群れではないか。この程度の連中、作戦など必要なかったな、やはり」

「そうでもないさ。龍も言っていたが、作戦があるからこそ、我々はより安全に戦う事ができるのだからな」

敵の群れを見ながら会話をする、秋蘭と秋蘭。そして、敵の中腹辺りになった時

「ふむ・・・・・・・・そろそろ頃合いかな？」

「まだだ。横殴りでは、混乱の度合いが薄くなる」

と春蘭は攻撃を仕掛けようとしています。しかし、秋蘭はまだ早いという事でそれを止めました

「ま、まだか・・・・・・・・？」

「まだだ」

秋蘭はまだ時機ではないという感じで、今にも敵をぶっ飛ばしたくてウズウズしている春蘭を抑えます

「もう良いだろう！ もう！」

「まだだと言っているのに．．．．少しは落ち着け姉者」

「だが、これだけ無防備にされているとだな、思い切り殴りつけたくなる衝動が．．．．．」

「気持ちは分かるがな．．．．．」

春蘭はもう待ちきれずにウズウズが最高潮に達していました。しかし、それを秋蘭は苦笑しながら抑えます

そして、敵の殿が現れた時

「敵の殿だぞ！ もう良いな！」

「うむ。遠慮なく行ってくれ」

秋蘭の攻撃の許可がおりた春蘭が嬉々として剣を抜きます

「頼むぞ、秋蘭」

「応。夏侯淵隊、撃ち方用意！」

「ようし！ 総員攻撃用意！ 相手の混乱に呑み込まれるな！ 平時の訓練を思い出せ！ 混乱は相手に与えるだけにせよ！」

秋蘭の部隊が弓を構えると、春蘭は兵士たちに指示を出していきます

「敵中央に向け、一斉射撃！ 撃ていつ！」

「統率など無い暴徒の群れなど、触れる端から叩き潰せ！ 総員、突撃いいいいっ！」

秋蘭の合図と共に矢を射る兵士たち。そして、春蘭は兵士たちと共に盗賊団の群れへと突撃していきました

……SIDE END……

「後方の崖から夏侯惇さまの旗と、矢の雨を確認！ 奇襲成功です！」

「さすが秋蘭。上手くやってくれたわね」

「春蘭さまは？」

「そうだなあ。恐らく敵の横腹あたりで突撃したくてたまらなくなっていたのを秋蘭殿に抑えられていたのではないかと推測できる」

「私もそう思うわ」

おっ。 桂花殿と同意見みたいだ。 まあ、あの春蘭殿だし、同意見なのは皆も同じかな？

「さて、お喋りはそこまでになさい。この隙を突いて、一気に畳み掛けるわよ」

「はっ！」

「季衣。あなたの武勇、期待させてもらっわね」

「分かりましたーっ」

「政也も期待しているわよ」

「・・・・・・・・はっ」

華琳殿は私と季衣に期待していると言って笑顔を向けてきた。やれやれ・・・・・・・・これは否応にも途中で倒れるワケにはいかなかったなあ

私と季衣の返事を聞いた華琳殿は、兵士さん達の方に視線を向けて

「総員反転！ 数を頼りの盗人どもに、本物の戦が何たるか、骨の髄まで叩き込んでやりなさい！」

『『『『『うおおおおおおおっ！！』』』』』

と声高らかに叫んだ。 それに呼応するかのように雄叫びをあげて反転する兵士さん達

「総員突撃！！！」

『『『『『うおおおおおおおっ！！』』』』』

私たちは華琳殿の号令により、混乱中の敵の中へと雪崩れ込んでいった

【ザシュッ】

私は騎乗しての攻撃はやはり、慣れていないと危ないと判断し、馬から降りて襲ってくる敵を斬り伏せていく

表情は無表情で通しているが、その分白狐を握る手に汗が滲んでいく。動物を狩る時とは違い、人を斬るというのは不快感たつぷりだ

「くそっ!! この女!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふん!!」

「ぐはっ!?!」

兵士さん達の隙をついて襲ってきた敵をまた一人切り伏せる。これを何十回ほど繰り返している

最初は斬る度に吐き気に襲われていた（まあ、吐くことはしなかった）が、次から次へと襲ってくる敵を斬り伏せていくうち、その感覚は薄れていった

まあ、吐く暇がないというのが正しいといえば正しい。敵は容赦なく私を殺しにきているのだから

そんな事を考えながら、兵士さん達に指示をしていると

「お姉ちゃん」

「どうした、季衣？」

ほかの場所で敵と対峙していた季衣がこちらにやってきた

「佳花がお姉ちゃんと春蘭さまと敵を追撃しろって」

「そうか。よし、春蘭殿が痺れを切らす前に合流するでしょう。
行くぞ、季衣！」

「うん！」

私は副官（仮）さんにここを任すと、季衣と共に春蘭殿の下へと向かった

……佳花SIDE……

「逃げる者は逃げ道を無理に塞ぐな！ 後方から追撃を掛ける、放つておけ！」

曹操さまの下で、兵たちに指示をとばす。 正面から下手に受け止めて噛み付かれないようにするために

「華琳さま。 〴〵無事でしたか」

「ご苦労様、秋蘭。 見事な働きだったわ」

その時、夏侯淵が私たちの方に近づいてきた

夏侯惇が見えないのは、どうせ追撃したいだろうから、季衣に夏侯惇と追撃するよう、指示しておいたから。 多分、今頃喜々として追撃してるに違いない。 ついでに抑え役として、龍と一緒に向かわせたけどね

【人間性とはかくとして、人使いが上手いですねえ】

はっ！ 今、誰かが私に対して無礼なことを考えている気配が……！

「佳花も見事な作戦だったわ。 負傷者もほとんどいないようだし、上出来よ」

「あ………ありがとうございます！」

や、やったわ！ 曹操さまに褒められたわ

ふふふ、これで私は晴れて曹操さまの軍師になれるわ

「そして………政也も流石ね、秋蘭」

「ええ。 兵への的確な指示で死傷者が皆無。 そして、敵を一太

刀で切り伏せる武。それでいて、何事にも動じない心も概ね持ち合わせておりますね」

夏侯淵が龍をそんな風に評価している。私も同意見ね。あの武を見るに曹操さまや夏侯惇が一目置くのがよく分かる

夏侯惇の様な荒々しさはなく。川魚が水中で泳ぐが如く自然に。葉が水面に浮いているが如く静かに。そう、まるで演舞を見ているかのような美しさが龍の武にある

多分、あの凛々しい表情とゆったりとした雰囲気こそ見せているに違いない

「龍將軍から伝令！」

その時、城の方から一人の兵士が近づいてきてこう告げた

「城門を突破。城の制圧に入るとのこと！」

「分かったわ。私たちも向かうわよ！」

「はっ！」

『『『『『うおおおおっ！！』『』『』『』』

その知らせを聞いた私たちは、城の制圧に加勢すべく、足を向かわせた

……SIDE END……

夜

城の制圧、盗賊団の残党の片付けなどが終わった頃には、日が暮れて夜となっていた。陳留には明日向かう事にした私たちは、制圧した城の近くで野営を敷くことにした

そして、私は負傷者がいる救護班の天幕にいた

「どうだい、痛みは消えたかい？」

「あ、はい。嘘のように痛みが消えています」

「それは良かった。けど、無理はいけないよ。治ったワケではないのだから」

「はい、ありがとうございます」

兵士さんは負傷した右腕を左腕で支えながら、私にお礼を言うてる。お礼を言われるというのは、やはり良いもんだな

「さてと………」

すべての負傷者の手当てを終えた私は天幕の外に出る。ふと、上を見ると星たちが輝いていた。この時代は現代よりも空気が澄んでいて、電球のような光もないからよく見える

「・・・・・・・・華琳殿、何かご用ですか？」

空を見上げながら、後ろに感じた華琳殿に声をかける

「・・・・・・・・いいえ。貴女の姿を見かけたから来ただけよ」

「そうですか・・・・・・・・そう言えば季衣はどうしてます？」

「ふふ。あつちで大量の食事をしているわ。あれだと持つてきた糧食は、陳留に着くまでに底をつきそうね」

「ははは、そうですか。なら、私から少し言っておきましょう」

「ふふ、お願い。じゃないと桂花の首をとらないといけなくなってしまうわ」

「ははは、そのつもりはないでしょうに」

「ふふ、それはどうかしら」

私と華琳殿は笑い合う

ああ。 この他愛のない時間がたまらなく好きだなあ。 この時間を守るためなら……私は戦で蛇にも鬼にもなりましょう

それをこの夜空に誓いますよ、華琳殿……

……華琳SIDE……

天幕から出てきた時は腹に一物も抱えているように思えた政也。けど、今は何だかフツきた晴れやかな表情をしているわ。 そう。その笑顔よ、政也。 憂いを帯びた表情より、その凛々しく笑顔に満ちた表情の方が貴女の魅力を最大限に引き出すのだから

「……………あら？」

そう思いながら政也を見つめていると、手に見慣れない小瓶を持っているのに気付いた

「ん？ どうかしましたか？」

「その手に持つてるものは何かしら？」

「ああ。 これは薬です。 先程、作りました」

「薬？」

私は思わず首を傾げてしまった。このような小瓶に入っている薬など見たことも聞いたこともなかったからだ。すべての薬を見たワケではないけれど、書物の中にもそんなものはなかったはず

「これは我が家に伝わる秘伝の薬。私も先日知ったのですが、初代・龍政宗が作ったのだそうです」

政也はそう前置きすると、淡々と語りだした

「政宗もまた私と同様に生まれつき左目に視力がなく、さらに光による目の腫れに悩まされていました。そのため、目に良いと言われる薬などを買い、試していく日々を過ごしていました。ですが、どれも効果が薄い上に高価だったため、直ぐになくなってしまったのです。そこで政宗は考えたのです。自ら薬を作ろうと」

「・・・・・・・・それで、できたのが・・・・・・・・」

「はい。この薬です」

「そう・・・・・・・・良い話を聞かせてもらったわ、ありがとう」

私は小瓶を見つめながらお礼を言う。政也は少し呆気にとられて

「よく分かりませんが、お気に召しましたのであれば良かったです？」

と首を傾げながら、そう告げた

あら、その顔も良いわね

「ふふ。 さて、夜も更けてきたわ。 明日も早いし、もう寝ましようか」

「はい」

私と政也は挨拶を交わすと、それぞれの天幕へと戻っていった

……SIDE END……

数日後

私たちが盗賊団の本拠地（隠れ家）を出発してから数日が経過した。その間には残党狩りや他の盗賊団の退治など、色々な事があったが、予定にはさほど影響が出ず、順調に行軍している

あ、そうそう。 兵士さん達の間で、私を『独眼龍』とか『龍狐姫』とかそんな二つ名で呼んでいるらしい。 華琳殿と秋蘭殿がこっそりと伝えてくれた

『独眼龍』とは、秋蘭殿曰く、片目の將軍という意味で、兵士さん達が畏敬の念をもって、その名を付けたらしい。そんな器量を持ち合わせてはいないが、悪い気はしない

『龍狐姫』とは、華琳さま曰く、狐の尻尾のようなフワフワとした感じの髪を靡かせて、龍の如く敵を一刀両断する姫將軍という意味らしい。狐の尻尾のようなフワフワとした感じの髪って、一応ポニーテールなんだけどね。まあ、それは良いけど姫將軍って・・・

「・・・・・・・・しかし、華琳さまが気にかけておられた古書が見つからなかったのは、本当に残念だ」

秋蘭殿が話の流れでそう呟いた。そう言えば、それも目的の一つでもあったんだっけ。すっかり忘れてたよ

「太平要術の書でしたっけ？」

「うむ。大変用心の書だな」

私は“太平要術”と言ったが、春蘭殿から予想を斜め上に行く発言が飛び出した。“大変用心”って・・・・・・・・

「・・・・・・・・太平要術よ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「言ったよな！ わたし、そう言ったよな！」

春蘭殿・・・・・・・・残念ながら言っていないよ・・・・・・・・

「無知な盗賊に薪にでもされたか、落城の時に燃え落ちたのか・・・・・・・・まあ、代わりに桂花と季衣という得難い宝が手に入ったのだから、良しとしましょう」

苦笑しながらそう告げる、華琳殿。

そう。華琳殿の言う通り、季衣は私たちのところに残ることになった。この辺り（季衣の村も含む）を治めていた州牧が、盗賊に恐れをなして逃げ出したらしく、華琳殿が州牧の任も引き継いで治めることになったため、季衣が自ら華琳殿を守りたいと言ってきたからだ

「さて。後は桂花の事だけれど・・・・・・・・」

「・・・・・・・・はい」

「桂花。最初にした約束は覚えているわよね？」

「・・・・・・・・はい」

「城を目の前にして言うのも何だけれど、私……とてもお腹がすいているの。分かる？」

そう。結果は桂花殿の負けである。何とか桂花殿を勝たせようとやりくりをしていたが、昨夜、ついに糧食が尽きてしまい、ここにいる誰もが朝食抜きなのである。もちろん、華琳殿も例外ではない

理由としては、こちらの損害が少なすぎて、兵士さん達が予想以上に残ってしまった事と、この食べ盛りの季衣がたくさん食べてしまった事が挙げられる

まあ、季衣は私の言で少しは抑えてくれたんだけどね……………

「……………言い訳はしません。不可抗力や予測できない事態が起きるのが、戦場の常。それを言い訳にするは、愚の骨頂。これは一重に私の不徳のいたすところ……………」

桂花殿は素直にそう告げ、華琳殿の沙汰を待つ体勢をとり、更に言葉をついでいく

「……………首を刎ねるなり、思うままにしてくださいませ。ですが、せめて……………最後は、この夏侯惇ではなく、曹操さまの手で……………！」

「よく言っただわ。では……………その望み、叶えてやりましょ

う」

華琳殿はそう告げると、自分の得物を桂花殿の首にあてる。そして、桂花殿が目を閉じる。それを固唾を飲んで見守る私たち

しばらく、首に当てまま桂花を見つめていた華琳殿がフツと笑い、得物を首から退けた

「曹操さま．．．．．？」

「．．．．．そう思ったけれど、今回の遠征の功績を無視できないのも事実．．．．．いいわ。死刑を減刑して、お仕置きだけで許してあげる」

「曹操さま．．．．．！！」

「それから、季衣と共に、私を華琳と呼ぶことを許しましょう。より一層、奮起して仕えるように」

「あ．．．．．ありがとうございます！ 華琳さまっ！」

「ふふつ。 なら、桂花は城に戻ったら、私の部屋に来なさい。 たっぷり．．．．．可愛がってあげる」

「はい．．．．．っ！」

桂花殿は恍惚とした表情で大きな声で返事をして、華琳殿を見つめ

ていく。　　というか、お仕置きというのは・・・・・・・・やはり・・・・

ふと、他の三人を見ると、春蘭殿・秋蘭殿は羨ましそうな表情で桂
花殿を見つめており、季衣は全く分かっていないようだ。　　まあ、
季衣はまだ知らなくても良いことだから、良しとしよう

「お姉ちゃん。　　ボク、お腹すいたよー。　　何か食べに行こうよ」

「そうだな。　　片付けが終わったら、皆で何か食べに行こうか」

「やったあ！　　それじゃ早く帰りましょうー！」

季衣は嬉しそうに飛び跳ねながらそう言うと、私を引っ張り始めた。
ははは、本当に元気だなあ、季衣は・・・・・・・・

「ほら、春蘭さまも早く早くー！」

「分かったというに。　　ほら、秋蘭行くぞ」

「うむ」

こうして、私たちは盗賊退治の大仕事を終え、城へと帰ってきた。
新しい仲間を、二人も手に入れて・・・・・・・・

その男、独眼龍くっく（後書き）

新たに季衣と桂花が仲間になりました。そして、どんどん政也が女であるの間違われていきます

果して政也はどうなるのでしょうか………？

その男、独眼龍〜8〜（前書き）

第八話、更新しました

読んでくれたら幸いです。では、本編をどうぞ

その男、独眼龍〜8〜

盗賊団討伐から一週間ほどが経った。その間、私は秋蘭殿の手伝い、街の警備隊の指示等の文武官として忙しく働いていた

で、今現在、私は執務室でお茶（自分で入れた）を啜って寛いでいる。さっき、華琳殿が州牧に任命され、治める街が増えたことによる事務処理が終わったのだ。いや、普段の竹簡の量より多くて大変だったよ

『龍將軍！ 龍隊の新人全員、修練場に集合しました！』

「ああ。すぐ行くよ」

その時、私の部隊の副長（仮）さんが呼びにくる。湯のみを片付けて行くとしますか……

「で、華琳殿。何故、いるんです？」

修練場に着いたら龍隊の新人たちの他に華琳殿が待っていた。新人たちは直立不動だ。まあ、それは仕方がないとしても、何故ここに華琳殿がいるのかが分からない

「秋蘭の報告を聞いてたら、政也の隊の子達の話が聞こえてきてね」

「はあ……………」

私の問いにそう返事をしてきた華琳殿。うちの部隊の子達の話とは……………」

「『將軍達の中で一番強いのは誰だと思っ？』とか、『そりゃ、夏侯惇さまだろっ』とか、『いやいや、龍さまも捨て難い』とかね。それを聞いていたら、面白いと思って」

「……………將軍同士を戦わせて一番強い決めようということですか？」

「ええ。春蘭や秋蘭、季衣も承諾してくれたわ」

華琳殿はそう言うと、私の方を見てくる。あなたも承諾してくれるわよねと言わんばかりの良い笑顔だ

で、新人たちの方に視線を向けると、物凄く期待した表情で私の返事を待っているようだった

はぁ、仕方がない……………

「分かりました」

「ふふ。承諾してくれると思ったわ。じゃ、試合の会場に行きましょう」

「はい」

私は返事をする、華琳殿と一緒に試合の会場へと向かった。その際、華琳殿は部隊の皆に『新人は將軍たちの戦いを見といた方が良いわ。一緒に来なさい』と言ったので、新人の皆も一緒に試合会場へと向かった

「華琳さま、お待ちしております」

試合会場（城門を少し外れた場所）に到着した時、会場準備の指示をしているらしい桂花殿が近寄ってきて、華琳殿に挨拶をした。どうやら準備は整ってるみたいで、各隊の新人たちが固唾を飲んで今か今かと試合が始まるのを待っている

「桂花、準備はできてる？」

「はい。こちらです」

華琳殿は私に『頑張つてね』と言うと、桂花殿についていった。

そこは戦いがよく見える特等席で、刺客からすれば殺しやすい場所だが、それを阻止するかのように親衛隊がいるから安心だろう

私はそう思つて自分の部隊の新人たちに他の新人達の方へと向かうよう指示し、春蘭殿たちがいる場所に向かった

「遅いぞ、龍！」

「ああ、悪かったね」

控え場所につくと、開口一番に春蘭殿に怒鳴られる。私は苦笑しながら謝ると、秋蘭殿の隣に立つ

「しかし、秋蘭殿が承諾するとは珍しい。　　どういつ心境の変化で？」

「ふつ。　私も龍とは戦いたいと思つてたのでな。　いい機会だし、新人たちにも良い刺激になるだろうからな」

秋蘭殿は今か今かと戦いの火蓋が落とされるのを待っている春蘭殿を愛でながら、私の問いにそう返してきた

私と戦いたいとは意外だ。　普段の秋蘭殿を見ると、少し信じがたい。　まあ、春蘭殿と秋蘭殿は双子だから、似ている部分もあるのだろうか、納得するしかないな

「えっと、対戦するにしてもどのようにするんだい？」

「うむ。　それは　ん？　そろそろ始まるみたいだ。　桂花から戦いの流れを説明されるだろう」

「ああ、そうだね」

秋蘭殿は戦いの流れを喋ろうとした時、桂花殿が出てきたのに気付いたので喋るのをやめる。　いよいよか……

桂花殿が戦いの趣旨や流れを説明する。　まず総当たり戦を行い、第一位と第二位の将軍が再度戦って勝者が魏で一番強い将軍となるらしい

「という事は最低でも三回戦うということか……」

「うむ。　そう言う事だ」

秋蘭殿が私の呟きに頷いた時、桂花殿と入れ替わりに私の部隊の副長（仮）が出てきた……。　って、君は何をしてるんだい？

『曹操さまから審判役を仰せつかいました龍隊副長（仮）・王継おうけいです。よろしくお願いします』

あ、そう。審判は副長（仮）なのね……。って、華琳殿。
一応、私に断りを入れてくださいよ。まあ、良いですが……。・

『では試合を始めさせていただきます。まずは夏侯惇・夏侯淵両將軍前へ！』

「よし！」

「うむ」

副長（仮）の呼び出しにより、春蘭殿と秋蘭殿が定位置につく。
という事は、私は季衣と最初に戦うわけか……………

「お姉ちゃん、最初はボクとだね」

「ああ、そうみたいだね」

「ボク、負けないよ！」

「ははは、お手柔らかに頼むよ」

副長（仮）がそう叫ぶと、周りの新人達が歓声を上げる。秋蘭殿が春蘭殿の猛追に耐えきれずに弓を落としてしまい、春蘭殿の勝利が決まったのだ。春蘭殿に接近されての猛追は流石の秋蘭殿もつてところかな？

さて、次は私と季衣の戦いか……

『夏侯惇・夏侯淵両將軍は戻ってください。続きましては、龍・許緒両將軍前へ！』

「さて、行くか」

「うん」

春蘭殿と秋蘭殿と入れ替わりに私と季衣が定位置につき、お互いの得物を構える

季衣の得物は巨大鉄球。それを軽々持ち上げるのを見ると、どこにそんな力があるのか疑問に思ってしまうなあ

『龍！ 私と戦う前に負けるなよ！』

春蘭殿が叫でいるのを聞き流し、精神統一をしながら試合開始の合図があるのを待つ。そう言えばこんなに沢山の観衆の中、試合をするのは久しぶりだっけ。ふふ、春蘭殿ではないが、確かにこの

試合は楽しくやらないといけないな……

「両者準備はよいでしょうか？」

「うん！」

「ああ」

「では始め！」

副長（仮）の合図により、私と季衣の戦いが切っけ落とされた。
さて、季衣……楽しむのではないか

……華琳SIDE……

『両者準備はよいでしょうか？』

『うん！』

『ああ』

あら？ ふふ、政也の雰囲気が変わったわね

『では始め！』

王の合図で政也と季衣との戦いが始まる

最初に仕掛けたのは季衣。得物を政也目掛けて放り投げる。政也は少ない動きでそれを避けた

ふふ。やはり、あの時季衣の攻撃を受けたのは、季衣の思いを受け取るためだったみたいね

そう思いながら戦いを見守る。次に仕掛けたのは政也。一瞬のうちに季衣の懐に飛び込み、中段に構えていた得物で突きをする。

季衣は横に跳んでかわし、得物を戻して構える

政也の攻撃時の瞬間的な加速はかなり凄いわね。でも、試験の時の最後に見せた速さよりは遅い感じがするから、今のは様子見つてところかしら

「ねえ、桂花」

「はい」

「あなたはどっちが勝つと思う？」

「政也ではないでしょうか？」

「どうして？」

「季衣はあの得物を持ち上げられるほどの力があり、それは春蘭と同等ぐらいです。ですが、戦いにおいては経験不足と言わざる負

えません。それに対して政也は片目ではありますが、それを補えるだけの技量や状況判断能力が高いです。その点を鑑みて、政也の勝利の可能性が高いと言えます」

「そうね、私もそう思うわ。桂花、褒美をあげるわ。この試合が終わったら、私のところに来てちょうだい」

「華琳さま、ありがとうございます／＼／＼／＼」

と桂花と話をしながら、試合を見つめる

攻撃をかわした季衣はお返しとばかりに得物を振り回して何度も政也に攻撃するが、政也は冷静にそれを捌く。季衣が攻撃、政也が防御・回避という構図を数回繰り返した時、政也が動き出す。季衣が得物を投げた瞬間、政也は前に見せた速さで季衣の懐に飛び込んだ。季衣はその速さに驚愕して一瞬動きを止めてしまう。その隙を見逃さなかった政也は季衣の得物を払い落とし、季衣の首筋に得物を当てた

ふふ、政也の勝利ね……………

『『『『『……………』』』』』』

『……………はっ！　そ、それまで！　勝者、龍將軍！』

『『『『『おおおっ！！！』』』』』』

時が止まったかのように静まり返る兵士たち。しかし、王のその宣言で一気に歓声が上がった。『す、凄い………!』、『一生、ついていきます!』等の声も聞こえる。ふふ、やはり新人たちにこの試合を見せて良かったわ。これで一層、修練に励んでくれるでしょ

……SIDE END……

夜

模擬試合は夜まで続いて終決した。結果を言うと、優勝は春蘭殿。春蘭殿と私が決勝戦を行い、春蘭殿が勝利したのだ

「皆、素晴らしい戦いだったわ。春蘭、優勝おめでとう」

「はい!」

春蘭殿は物凄く良い笑顔だ。まあ、大好きな華琳殿に褒められたのだから仕方がないか。それにしても、今日はいつもより疲れたなあ。けど、良い経験だったし、たまには良いかな

「お姉ちゃん! お腹すいたよ」

「ははは、そうだね。じゃ、(春蘭殿の奢りで)何か食いに行こうか」

「やった！ 早く行こう！」

華琳殿の祝辞で模擬試験を終えて城へと戻る道中、季衣がそんなことを言ってきた。私が微笑みながらそう提案すると、季衣は物凄く良い笑顔になって私の手を取り、街へと急いでいく

そして、城へと戻った私と季衣と秋蘭殿（春蘭殿は桂花殿と共に華琳殿に呼ばれている）は季衣のオススメの店へと繰り出した

「おっ これ、美味しいな」

「うむ」

「うん！ 美味しいよね！」

季衣がオススメするだけあって、物凄く美味しかった。この麻婆豆腐も私好みの辛さで良い。そう思いながら私は皿に盛られた料理を堪能していった

「親仁さん、美味しかったよ。 また来るよ」

「へい！ ありがとうございやす」

十分に料理を堪能した私たちは店の親仁さんにお礼を言って城へと戻っていった。ちなみに、お支払いは優勝及び華琳殿に呼ばれた

ことでテンションMAXの春蘭殿がしてくれるらしい（悪笑）

その男、独眼龍〜8〜（後書き）

今回は將軍たちによる試合でした。多忙の中での息抜きの感じ
です

あ、試合結果はこんな感じです

総当たり戦

第一位	政也	(3 - 0)
第二位	春蘭	(2 - 1)
第三位	秋蘭	(1 - 0)
第四位	季衣	(0 - 3)

決勝戦

春蘭 vs 政也

（春蘭と政也の力は均衡してましたが、体力の差で春蘭が勝利を収
めました）

その男、独眼龍〜9〜（前書き）

第九話、更新しました

読んでくれたら幸いです。では、本編をどうぞ

その男、独眼龍く9く

模擬試合から一週間が経った

私はこの一週間華琳殿の命令で、街の警備の草案を考えていた。
それが華琳殿に許可をもらえたのが昨日で、今日は午後から街の視察と相成ったわけだ

「き、貴様は誰だ!？」

「ん？」

集合場所で待っていると、後ろから春蘭殿の声が聞こえた。振り返ると大剣を構えた春蘭殿とその後ろで警戒している桂花殿がいた
二人は私の顔を見た途端、驚いた顔になる

「……………どうしたのだ、龍よ？」

「？」

「何故、髪型を変えたのよ！ 不審者が侵入したのかと思っちゃったじゃない！」

春蘭殿の問いに首を傾げると、桂花殿がそう怒鳴ってきた

ああ、そう言えば髪型をポニーテールに直すのを忘れていたね

「さっきまで倉庫の整理をしていたんだ。掃除の時、決まって三つ編みで三角巾だったものでね」

ポニーテール＋三角巾だと、どうも違和感がある。そのため、いつも三つ編み＋三角巾にしていたワケだが、今日は倉庫からそのまま集合場所へやってきたので、三つ編みをポニーテールに直すのを忘れていたのだ

「ふ、ふん。そ、そうなの」

「うむ。それは仕方がないな」

桂花殿は若干、納得していない風だったが、春蘭殿はうんうんと頷いてくれた。まあ、三つ編み＋三角巾は私の感覚だからね。桂花殿が納得しなくても当たり前だね、うん

「で、華琳殿と秋蘭殿はまだお昼かい？」

「うむ、食事は済んだのだが……。何か髪の毛のまとまりが悪いとかだな。今、秋蘭に整えさせている」

「なるほど」

今日はいつもより、若干湿度が高い感じだからな。明日あたり雨でも降るかな？

私もこの長髪を整えるのに少し時間がかかるので、女の子の気持ちには分からんでもない。それに、華琳殿は州牧だ。身嗜みにも気をつけなくてはならないから仕方がないな

「……………それにしても、華琳殿の州牧就任は大変なことだね」

「華琳さまには既に陳留刺史としての十分な実績があるだろう。州牧など、ごく正当な評価……………いや、むしろ低いくらいだ」

「ははは。そうだね」

「うむ。本来の州牧が逃亡した非常時でもあるしな。中央にも、わざわざ人を選別して派遣するより、有能な華琳さまに任せよう、と思った見る目のある奴がいたのだろう」

「それに、中央にも知り合いは何人かいたしね」

「ほう……………」

中央の知り合いか……………

なるほど、華琳殿の州牧就任の裏には佳花殿も絡んでいるというわけか

「中央の知り合いというと、袁紹の？」

「ええ。袁紹の所つて、扱いは悪かったけど、中央との繋がりだけはたくさん作れたのよね」

「……………それを知つて華琳殿は怒つてます？」

私が振り返つてそう尋ねると、華琳殿は笑顔で桂花殿を見つめ

「別に怒らないわよ」

「華琳さま……………」

「なりふりを構つていられるほど、今の私たちに力も余裕もないでしょう。使えるものなら天の知識でも部下の繋がりでも、遠慮なく使わせてもらつわ」

そう宣言する。桂花殿を見つめていた華琳殿は、次に私の顔をマジマジと見つめてくる。やっぱり気になるかな、この髪型は？

「……………似合つてるわね、その髪型。決めたわ。いつもその髪型にきなさい」

「はあ……………それは構いませんが、何故？」
なにゆえ

「理由はその髪型の方が可愛いからよ。　良いわね、明日からもその髪型にきなさい」

「は、はぁ・・・・・・・・分かりました」

可愛いから三つ編みですか・・・・・・・・まあ、髪型にこだわりはないから別に良いけど、理由がなぁ・・・・・・・・

このままだと男というのが益々分からなくなりそうなのがするの私だけかな？

「華琳さまの髪の方は大丈夫ですか？」

「ええ、雨でも降るのかしらね？　いつもと違うようにしかまもらなかったのよ・・・・・・・・どう？　政也から見ても変じゃないかしら？」

「え？　そ、そうですね・・・・・・・・」

春蘭殿の問いに華琳殿がそう尋ねてくる。　私は我に返ると、華琳殿の髪をじっくりと見ていく

うむ。　少し、まとまりが悪い気がするが、いつもの華琳殿と変わりはしない

「ええ。大丈夫ですよ」

「なら良いわ。それに、州牧になったおかげで季衣との約束を守ることができたわけだもの。言うことはないわね」

「そうですか。あれ？　ところで、季衣は？」

街へは皆で行く予定だったはずなんだけど……いつも賑やかな、季衣の姿が見えない

「今朝、山賊のアジトが分かったという報告が入ってな。討伐は私が姉者が龍がでるから街を見てこいと言ったのだから、聞かなくてはな」

「そうなのか……」

「ああ。自分の村と同じ目に遭っている村を見ていられんのだろう。はりきって出掛けていったぞ」

「じゃ、お土産くらいは買って帰らないといけないな」

「何だ、考えることは同じか」

「あんたたち、観光に行くわけじゃないのよ？」

「視察はちゃんとやりますよ。その上で季衣にお土産を買うつらいは別に良いでしょう、華琳殿？」

「仕事をちゃんとするならね」

「はいっ！」

「……返事だけにならなければいいけど」

「さて、揃ったのなら出掛けるわよ。桂花、留守番、よろしくお願いね」

「……はい。　　いつてらっしゃいませ」

桂花殿は少し複雑そうにしながらも、そう返事をして私たちを送りだした。桂花殿が留守番なのは、非常事態に備えてだ。桂花殿なら非常事態でも冷静に対応してくれるからね

街にでると旅芸人がいたので立ち止まる

秋蘭殿曰く、南方から女の子三人で陳留にやってきたのは珍しいらしい。商人のと違って安全な街道が確保されていなければ寄ってこないらしいため、それだけ私たちの働きが認められてたってこと

である

「まあ、腕としては並という所ね」

華琳殿の言う通り、この三人組の歌は上手とも下手とも言えない感じである

「それより、私たちは旅芸人の演奏を聴きに來たわけではないのよ？」

街の視察ですね

「狭い街ではないし、時間もあまりないわ。手分けして見ていきましょうか……」

「では、わたしは華琳さまと……」

「政也は私に付いてきなさい」

「はい？」

「えー……」

「……諦めろ、姉者。我々より、龍の方が素早く敵を察知できるのだから」

「・・・・・・・・うう。　そういうことか・・・・・・・・龍」

「何だい？」

「どうしたらそんなに気配を読むのが早くなるのだ？」

「ううん。　こればかりは修練してくれとしか言えないね」

気配の察知能力は片目での剣術修業の賜物だ。　春蘭殿に片目になれとは言えないから、そう答えるしかなかったのは言うまでもない

「華琳さま。　私は街の右手側、姉者には左手側を回らせます。それでよろしいですか？」

「問題ないわ。　では、突き当たりの門の所で落ち合いましょう」

「はっ」

「・・・・・・・・・・はあ」

そんなわけで私たちは、春蘭殿や秋蘭殿と別れて回るようになった
私と華琳殿が担当する街の中央部は、真ん中を走る大通りと、そこに並ぶ市場がメインになる。　しかし、華琳殿が最初に入ったのは小さな店や住宅がひしめき合う裏通りだ

その理由としては、大きな所の意見は黙っていても集まるものだし、
こういう所の雰囲気は実際に視察してこそ意味があることだろう

「はい、寄ってらっしゃい見てらっしゃーい！」

華琳殿と店の視察を行っていると、一つの露店の前に人ばかりができていた。そこにいたのは、露店商らしき少女だった。猫の額ほどのスペースには、竹カゴがずらりと並べられている

「ん？ これは・・・・・・・・・・？」

「どうかした、政也？」

足を止めて竹カゴを見ると、店主の少女の脇に置いてあるものに興味をそそられた。それは箱状のフレームの中に、木や金属で作られた歯車が規則正しく並んでいる装置だった

まあ、歯車がこの時代にあつたかどうかは別として、この精巧に作られた装置は目を見張るものがある。興味深かそうに装置を見ると、店主の少女が気がつき

「おお、そこのお二方、なんともお目が高い！ こいつはウチが発明した、全自動カゴ編み装置や！」

「全自動・・・・・・・・カゴ編み装置・・・・・・・・・・？」

と私と華琳殿に声をかけてきた。その言葉に華琳殿が頭に疑問符をだしながらそう呟き、私はそれを興味深く見つめる。 全自動か・
・
・
・
・

「せや！ この絡繰の底にこう、竹を細う切った材料をぐるーっと一周突っ込んでやな・・・・・その姉さん、こっちの取っ手を持って！」

「うむうむ」

私は頷きながら装置の横にっていたハンドルを手にとった

「でな。 こうやって、ぐるぐるーっと」

少女の言う通りにハンドルをグルグル回していくと、セットされた竹の薄板が装置に吸い込まれていき、しらばらくすると、装置の上から編み上げられた竹のカゴの側面がゆっくりとせり出してきた

「ほら、こうやって、竹カゴのまわりが簡単に編めるんよ！」

「ほう・・・・・なかなか、よく出来ている」

全自動ではないが、それを言うのは無粋ってもんだらう。　まあ、それは良いとして、この装置……

「……………底と枠の部分はどうするの？」

「あ、そこは手動です」

「……………そう。　まあ、便利といえば、便利ね」

華琳殿は呆れながらも、この装置をそう批評する。　そう、便利と言えば便利だ。　しかし、この装置は構造的にいつて試作の段階だろう

私は絡繰を見ただけで、ある程度構造が分かる。　これは祖父ちゃんの修業（未だに意味があつたのか分からないものばかり）の一つに絡繰を分解し、それを元に組み立てるというものの副産物だ

で、この装置はある程度は竹を編めるが、しばらくすると……………

「あ、ちょ！　お姉さん、危ないっ！」

少女がそう叫んだ時にはもう遅い

「大丈夫、政也？」

「大丈夫です」

パンツという音とともに、私の持っていた装置がハンドル部分を残して周囲に吹き飛び、バラバラになった木製の歯車や、吹き飛んだ竹力ゴの材料が、その辺りに散らばっている。そう、ハンドルを回しつづけると竹のしなりに耐え切れなくなつて爆発してしまうのだ

【分かつてたのなら、回すのをやめてくださいよ……………】

ん？ 今、何か聞こえた気がするが……………まあ、気のせいだろう

「あー。 やっぱダメやったかあ……………」

少女は頭を掻きながら、そう呟く

「まだそれ、試作品なんよ。 普通に作ると、竹のしなりにこう強度が追いつかんでなあ……………こうやって、爆発してしまうんだよ」

「……………で、そんなものを持ってきた理由は？」

「置いとつたらこう、目立つかなあ……………て思てな」

やれやれ、私だったから良いものの……

「ならここに並んでいるカゴは、この装置で作ったものではないの？」

「ああ、村のみんなの手作りや」

「……………」

「やれやれ……………（苦笑）」

少女のその顔に華琳殿は呆れ顔だ。 私も苦笑いしかできない

ただまあ、装置を壊してしまったし、ここは竹カゴを買うとするか

「店主、装置を壊したお詫びだ。 一つ買っよ。 華琳殿、良いですネ？」

「……………まあ一つくらいなら、良いわ」

華琳殿に許可をもらった私は竹カゴを一つ買った。 正直言つと、部屋の竹カゴの底が抜けていたから、ちょうど良かったよ

集場所は、突き当たりの門の所。 ゆっくりと回った思ったのに、集まったのは私と華琳殿が一番早かった。 とはいえ、それほど待つこともなく、二人も合流したんだけど・・・

「・・・・・・・・で？」

「「「・・・・・・・・「「「

「どうしてみんな、揃いも揃って竹カゴなんて抱えているのかしら」

「はあ。 今朝、部屋のカゴの底が抜けているのに気付きました・・・・・・・・」

「・・・・・・・・まあ、なら仕方ないわね。 どうせあなたの事だから、気になって仕方なかったのでしょうか？」

「は。 直そうとは思っていたのですが、こればかりはどうにも・・・・・・・・」

「いいわ。 で、春蘭は？ 何か山ほど入れているようだけれど・・・・・・・・」

「こつ、これは……季衣の土産にございます!」

「何? 服?」

「はっ! 左様でございます!」

「……そう。土産も良いけどほどほどにさいな」

「はいっ! ほどほどにしますっ!」

「……で、どうして龍もそんなカゴを背負っているのだ?」

「試作品を壊してしまつてね。そのお詫びさ」

「……そうか」

「それで、視察はちゃんと済ませたのですね。カゴなり土産なりを選ぶのに時間をかけすぎたとは、言わせないわよ」

「はいっ!」

「無論です」

「なら良いわ。帰ったら今回の視察の件、報告書にまとめて提出するように……政也もね」

「了解です」

私が華琳殿の言葉に頷いた時、その声は、唐突に掛けられた

「その、若いの・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・誰？」

「その、お主・・・・・・・・」

声の主は、目深に布を被った人物だった。低くしわがれた声は、お婆さんのようにも・・・・・・・・若い男が無理に声を作っているようにも聞こえてくる

もちろん被った布のせいで、表情なんか全く分からないし、気配すら読み取ることができない。この人は相当できるぞ・・・・・・・・

「何だ？ 貴様」

「占い師か・・・・・・・・」

「華琳さまは占いなどお信じにならん。 慎め！」

「・・・・・・・・春蘭、秋蘭。 控えなさい」

「は？ ・・・・・・・・はっ」

「強い相が見えるの・・・・・・・・希にすら見たことの無い強い強い相じゃ」

「いったい何が見えると？　言つてごらんなさい」

「力の有る相じゃ。　兵を従え、知を尊び・・・・・・・・お主が持つは、この国の器を満たし、繁らせ栄えさせる事のできる強い相・・・・・・・・この国にとって、稀代の名臣となる相じゃ・・・・・・・・」

「ほう。　よく分かっているではないか」

「・・・・・・・・国にそれだけの器があれば・・・・・・・・じゃがの」

「・・・・・・・・どういうことだ？」

「お主の力、今の弱った国の器には収まりきらぬ。　その野心、留まるを知らず・・・・・・・・あふれた野心は、国を犯し、野を侵し・・・・・・・・いずれ、この国の歴史に名を残すほどの、類い希なる奸雄となるであろう」

「貴様！　華琳さまを愚弄する気が・・・・・・・・っ！」

「秋蘭殿、落ち着きなさい」

「・・・・・・・・し、しかし龍！」

私は今に飛びださんばかりに怒った秋蘭殿を手で制する。　それでも動かうとする秋蘭殿を華琳殿が目で制する。　そして、その顔に笑みを浮かべながら口を開いた

「そう。　乱世においては、奸雄となると・・・・・・・・？」

「左様・・・・・・・・それも、今までの歴史にないほどのな」

「・・・・・・・・ふふつ。面白い。気に入ったわ・・・・・・・・秋
蘭、この占い師に謝礼を」

「は・・・・・・・・？」

「聞こえなかった？ 礼を」

「し、しかし華琳さま・・・・・・・・」

「・・・・・・・・政也。この占い師に、幾ばくかの礼を」

「はい」

私は頷くと、幾らかのお金を占い師が置いていた茶碗の中に入れる
秋蘭殿は華琳殿を悪く言われたことが気に入らないんだろう。 占
い師を静かに睨み付けている

「乱世の奸雄大いに結構。 その程度の覚悟もないようでは、この
乱れた世に覇を唱えるなどではしない。 そういうことでしょ
う？」

それでこそ、華琳殿だ・・・・・・・・

「それから、そこのお主・・・・・・・・」

「・・・・・・・・私かい？」

「大局の帰路が、数度訪れる。しかし、己の信ずる道を突き進みなされ。さすれば、道は開かれよう」

「・・・・・・・・分かった。その言葉、確かに心に刻みこもう」

私はそう言つと、華琳殿たちとともにその場を後にした

大局の帰路が何なのか分からない。しかし、己の信ずる道を突き進めと占い師は言つた

何があつても、華琳殿とともに・・・・・・・・それが私の信ずる道だ・
・・・・・・・・！

私は改めて華琳殿に忠誠を誓うのだった

その男、独眼龍く9く（後書き）

今回は街の視察および占い師との邂逅でした。 占い師に己の信ずる道に突き進めと言われた政也の選ぶ道とは・・・・・・・・！！

政也の髪型をポニーテールから三つ編み（下記）にしました

> i 2 8 8 9 9 — 3 7 2 6 <

今後も政也をよろしくお願いします

その男、独眼龍〜10〜（前書き）

第十話、更新しました

話的に無理がある感じですが、それでも良いと言っ方はお読みください

では、本編をどうぞ

その男、独眼龍〜10〜

華琳殿が州牧になられてから、数カ月が経とうとしていた

私は今、暴徒と化した町人の鎮圧に出ている。この暴徒は数日前から出始め、急激に数を増やしている印象がある

そして、その特徴は敵の特徴は数が多いが、個々の実力が大したことがないため隊列も連携も全然成ってなく、すぐに逃げていく。こんな風にね………

「龍將軍！ 敵、撤退していきます！」

「分かってる。隊列を整えた後、一応追撃を出しておいてくれ。何度も言うようだが、相手はただの町人だ。殺さず、追い払うだけにしてくれ」

「はっ！」

伝令に指示を出すと、逃げていく敵を見据える

遠くでも分かる黄色い布。その布を全ての暴徒たちが身に付けている

「いよいよか………」

「どうかしましたか、龍將軍？」

「いや、何でもない。　追撃部隊が戻り次第、撤収する。　良いね？」

「はっ！」

私の呟きに副長（仮）が問いかけてくる。　私はそう指示を出して誤魔化すと、空を見つめる

いよいよ、黄巾の乱が始まるか……。いや、もう始まっていると言えるな

「龍將軍。　追撃部隊、戻ってきました」

「そうか。　隊列を整えろ！　撤収するぞ！」

『『『『『おう！』『』『』『』』』』』

まあ良い。　私は私の成すべきことをするだけだ。　私はそう考えながら城へと戻っていくのだった

「・・・・・・・・・・というわけです」

「そう・・・・・・・・・・やはり、黄色い布が」

次の日の朝の軍議での議題は昨日と今日の暴徒たちの鎮圧の報告から始まった。今日は春蘭殿と季衣、秋蘭殿が鎮圧に向かったが、その暴徒も昨日の暴徒たちと同様に黄色い布を身に付けていたらしい

「桂花。そちらはどうだった？」

「は。面識のある諸侯に連絡を取っていましたが・・・・・・・・どこも陳留と同じく、黄色い布を身に付けた暴徒の対応に手を焼いているようです」

「具体的には・・・・・・・・・・？」

「二こと・・・・・・・・二こと、それからこちらも」

桂花殿はそう呟きつつ、広げた地図の上に磨かれた丸石を置いていく。私がいた現在とは違って、このごろの時代は地図というのは貴重なため、こういう形で場所を表している

「それと一団の首魁の名前は張角というらしいのですが……
正体は全く不明だそうです」

「正体不明？」

「捕らえた賊を尋問しても誰一人として話さなかったとか」

なるほど。 史実と同様に張角は相当、信賴を勝ち得る手段を用いているとみて間違いないな

そして、漠然とだが思っていることがある。 それは張角も女性であるということだ。 しかし、これはあくまで可能性があるというだけなので華琳殿たちには言っていない。 明確な根拠のない情報は華琳殿たちの判断を鈍らすからね

「……………」

「政也、どうしたの？ 何か知っている顔ね」

黙って思案していると、それに気がついた華琳殿が訊ねてくる

「……………いいえ。 これは明確な根拠ない情報ですので、お耳に入れる段階ではありません。 もう少し、情報がそろってから伝えたいと思います」

「そう。何か分かったら教えてちょうだい」

「御意。それと敵の名を黄巾党と呼ばれるのはどうでしょう？
敵とか暴徒とか呼ぶよりは良いと思うのですが」

「そうね。今後はそう呼ぶことにしましょう。それで皆、他に
新しい情報はないの？」

「はい。これ以上は何も……」

「こちらありません」

「……」

私も沈黙で同意する

「ならば、まずは情報収集ね。その張角という輩の正体も確かめ
ないと……」

華琳殿のその言葉で少し場に気の抜けた空気が漂った時、一人の兵
士さんが慌てて入ってきた

「会議中失礼いたします！」

「何事だ！」

「はっ！ 南西の村で、新たな暴徒が発生したと報告がありました！ また黄色い布です！」

兵士さんが言い終わる時には、私たちは気を引き締め、華琳殿の名を待つ。華琳殿は『休む暇もないわね』とため息を吐きつつ、気を引き締めた表情で私たちを見つめながら口を開く

「さて、情報源が早速現れてくれたわけだけれど。今度は誰が行ってくれるのかしら？」

「はいっ！ ボクが行きます！」

「季衣ね……………」

華琳殿の言に勢いよく手を挙げたのは季衣だった。しかし、華琳殿はそれ以上言葉を続けず、思案顔で季衣を見つめている。いつもならば即断即決をしている華琳殿としては珍しいが、それにはワケがあった

「……………季衣。お前は最近、働き過ぎだぞ。ここしばらく碌に休んでおらんだろう」

そう。春蘭殿の言うとおり、ここ最近の出撃ではほとんど季衣が出撃をしているため、休んでいるところをあまり見かけない

以前の街の視察の時もそうだったが、季衣は自分の村と同じように困っている村をたくさん救えるようになったため、その村のために頑張りたいという気持ちで動いているのだろう。だが……………

「華琳殿。この件、私が」

「どうしてなの、お姉ちゃんっ！　ボク、全然疲れてなんかないのに……………！」

季衣は私を睨みつけるように叫ぶ。しかし、季衣の表情や気配は相当疲れが溜まっているのが見て取れる

「そうね。今回の出撃、季衣は外しましょう。確かに最近の季衣の出撃回数は多過ぎるわ」

「華琳さまっ！」

「季衣。あなたのその心はとても貴いものだけれど……………無茶を頼んで体を壊しては、元も子もないわよ」

「無茶なんかじゃ……………ないです」

季衣は僅かだが口籠った。自分でも無茶だと言ったことを本当は分かっているのだろう

しかし、まだ自分の村と同じような村を助けたいという気持ちが大

きいたため、それを素直に認めることができないのか、なおも食い下がろうとする。私はそれを制すると口を開いた

「季衣。その一つの無茶で、君の目の前にいる百の民は救えるかもしれない。けどそれは、その先救えるはずの何万という民を見殺しにする事に繋がることもある．．．．．分かるかい？」

「だったらその百の民は見殺しにするの!？」

「するわけが無いだろう．．．．．!!!」

「．．．．．っ!」

私は季衣の言葉に対して思わず怒鳴ってしまった

【その声は季衣だけではなく、春蘭や秋蘭ですら身を縮ませるものでした】

「．．．．．季衣。君が休んでいる時は、私や春蘭殿たちが代わりにその百の民を救う。私の目に見える範囲、白狐が届く範囲は誰も死なせはしない。だから、今は休みなさい」

私は華琳殿に大声を上げた事を詫びると、しゃがみ込んで季衣に話しかける。しかし、季衣はまだ納得できないようで小さく唸っている

ふう・・・・・・・・相当な頑固さだなあ

「季衣。 私たちは今日の百人も、明日の万人も助けなければなら
ないんだ。 もし君が倒れたら、救えるはずの民を救うことはでき
ないんだよ?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「政也の言う通りよ。 民を救う為に必要と判断すれば、無理でも
何でも遠慮なく使ってあげる・・・・・・・・けれど今はまだ、その時
ではないの」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

私や華琳殿の言葉にも、季衣は下を向いたまま黙って何も答えよう
としない

季衣の気持ちは痛いほど分かる。 しかし、今の季衣を戦いに行か
せるわけにはいかない

私は立ちあがると、華琳殿の方を向く。 華琳殿は頷くと口を開いた

「桂花。 編成を決めなさい」

「御意・・・・・・・・では秋蘭、政也。 今回の件、貴女たちが行っ
てちょうだい」

私と秋蘭殿・・・・・・・・？ 今回の出勤は、戦闘よりも情報収集が大切になってくるから、秋蘭殿が行くのは分かるんだが・・・・・・・・私のいる意味はあるのかね？

まあ、桂花殿の事だから考えがあつてのことだろう。私はそれに従うだけだな

「決まりね。秋蘭、政也。くれぐれも情報収集は入念にしない」

「分かりました」

「では直ぐに兵を集め出立致します」

華琳殿の言葉に私と秋蘭殿がそう返答すると、今まで下を向いていた季衣が顔を上げた

「・・・・・・・・あの・・・・・・・・えつと・・・・・・・・ボクの方まで、よろしく願いしますっ！」

「ふ・・・・・・・・うむ。お主の想い、しかと受け取った。任せ
ておけ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・季衣はしっかりと休むんだぞ？」

季衣の本当の想いを感じ取ったが、敢えて無視してそう告げて玉座の間を後にする

それから四半刻一（三十分）で準備を整えた私と秋蘭殿は、黄巾党が現れた南西の村へと馬を走らせた

……副長（仮）SIDE……

私は龍隊の副長（仮）・王継です。実際には私は副長ではありませんが、副長と同じような仕事をしているので、（仮）を付けさせてもらっています。それで、皆さんには副長（仮）と呼ばれております

そして今、私は許緒様を探しております。それは先程、龍様に城に残って許緒様の話し相手になってほしいと言われたためです。私に務まるかどうかは分かりませんが、頑張りたいと思っています

多分、許緒様は龍様たちの見送りで城壁におられると思うのですが……あ、見つけました

「……………」

許緒様は龍様が仰られた通り、いつもの元気がないようです

「許緒様」

「あ、副長（仮）さん・・・・・・・・どうしてここに・・・・・・・・？」

「龍様に今回は残るように言われましたので、城の見回りをしていたのです」

「そうなんだ・・・・・・・・」

龍様に頼まれたとは言えませんので、そう弁明します。

許緒様はそう呟きつつ、ぼんやりと城壁の上に腰掛けて足をぶらぶらさせています。いつもの元気の良さはどこもなく、頭のお団子何だか萎れ気味です

「どうかしたのですか・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・ボク、全然疲れてないのに」

私の問いかけにポツポツと話した許緒様。私はその内容を聞いて、どうやって話をしようか悩んでしまいました。許緒様の気持ちも龍様たちの気持ちも分かるからです

そうです。ここは準備の時に龍様が仰られていた言葉を言いましょう。少しは許緒様の気持ちが和らげられると思います

「ああ、そう言えば龍様から許緒様に伝言を頼まれていました」

「え・・・・・・・・？」

「『今は、黄巾党と張角の正体を突き止めるための情報を集める時。君に本気で働いてもらうのは、そいつらの正体が分かった後だよ。だから今は、休める時はちゃんと休んで、こんな騒動を起こした奴をやつつけるための力を、溜めといてくれ』と仰られておりました」

「・・・・・・・・・・・・・・・・うん。分かった」

許緒様は幾分か元氣を取り戻したらしく、そう答えてひょいっと城壁の上に飛び乗りました

「あ。危ないですよ、許緒様」

「大丈夫だよ。それに今、何ていうか、力が湧いてきて、我慢できない感じなんだ！」

心配する私を余所に、許緒様はそう仰られると、城壁の上で歌を歌い始めました

それは、失礼ですが、けっして上手くはありません。ですが、何だか許緒様の元氣をそのまま分けてもらってるような、聞いているだけで嬉しくなるような歌声です

門を出ていく仲間の兵士たちが、こちらを見上げて手を振ってきま

す。彼らの顔も私と同じように嬉しそうです。

あ。龍様も手を振っておられます。私が会釈をすると、笑顔で頷いてくれました。

「……………良い歌ですね。何て言う歌でしょうか？」

「さあ？　ちよつと前に、街で歌ってた旅芸人さんの歌なんだけど……………確か、名前は張角……………あつ！　副長（仮）さん！」

「は、はいっ！　な、何でしょうか！？」

「華琳さまに報告してくるね！！」

「あ、はいっ！！」

許緒様はそう仰られると、城壁を駆け下りていかれました。私は何が何だか分かりませんでした。が、許緒様が元気になられた事に喜びを感じていました。

「……………さて、本当に見回りでもしましょうか」

しばらく許緒様が向かわれた場所を見つめていた私は、そう呟いて見回りをする事にしました。

……SIDE END……

私たちが討伐兼情報収集から戻ったのは、その日の晩遅くのこと

いつもなら報告は翌朝に回す時間だったが、今夜ばかりは主要メンバーが集められ、直ぐに報告会が開かれていた

話によると、季衣と副長（仮）の何気ない会話で、歌を歌う旅芸人の一人の名前が張角だということを思い出したらしい

「……………間違いないのね」

「確かに今日行った村でも、三人組の女の旅芸人が立ち寄っていたという情報がありました。恐らく、季衣の見た張角と同一人物でしょう」

「はい。ボクが見た旅芸人さんも、女の子の三人組でした」

「季衣の報告を受けて、黄巾の蜂起があつた陳留周辺のいくつかの村にも調査の兵を向かわせましたが……………大半の村で同様の目撃例がありました」

「その旅芸人の張角という娘が、黄巾党の首魁の張角ということで間違いないようね」

「これで、張角の正体は判明か……………」

やはり、張角も女性だったか……。村での情報、季衣の情報を鑑みて旅芸人というのは、街の視察で見た三人組ということになるな。それにしても旅芸人か……

「正体が分かっただけでも前進ではあるけれど……。可能ならば、張角の目的が知りたいわね」

「……。目的ですか……。歌い手ということなら、本人们はただ楽しく歌っていただけで、周りが暴走しているだけかもしれないですね」

ほんの冗談のつもりで『わたし、大陸が欲しいのー』とか言つて、熱狂的ファンがそのために暴れ出した……。とか？

「だとしたら余計タチが悪いわ。大陸制覇の野望でも持つてくれている方が、遠慮なく叩き潰せるのだけれど」

「確かにそうですが……。ああ。都から軍令が届いたんですね？」

「ええ、夕方にね。早急に黄巾の賊徒を平定せよ、とね」

「今更ですね……。」

「ええ、今更よ」

やれやれ、これだけ大騒ぎになった後に出すような命令ではないだろうに。　どんな瞳で物事を見定めてるのだろうか……

まあ、それがこの時期の朝廷の實力つてことで片付けとくか。　それにこの軍令のお陰で、大手を振って大規模な戦力も動かせるようになったワケだし、一応は感謝しておこう

「華琳さまっ！」

その時、兵の準備をしていた春蘭殿が入ってきた。　あらら、これは……

「また件の黄巾の連中が現れたと報告がありました。　それも、今までにない規模だそうです」

「……そう。　一步遅かったということか」

やはり、後手に回ってしまったらしい。　華琳殿はイライラした様子でそう呟くと、その怒りを吐き出すように、ため息を一つ

「……ふう。　春蘭、兵の準備は終わっているの？」

「申し訳ありません。　最後の物資搬入が、明日の払曉になるのそうで……既に兵に休息をとらせています」

あらら、かなり間の悪いこと、悪いこと……

「……………恐らく連中は、いくつかの暴徒が寄り集まってできたもの。しかも、今までにない規模の集団となると……………指揮官がいると見た方が良いね。仮にいなかったとしても……………それだけの能力を持つ奴は、集団に一人二人はいるもの。そういった必ず指揮官に祭り上げられる」

「政也の言う通り。万全の状態で当たりたくはあるけれど、時間もないわね。さて、どうするか……………」

「華琳さま！」

どうするか悩んでいると、手を挙げたのは今まで黙っていた季衣だった

「……………」

「華琳さま！　ボクが行きます！」

「……………季衣！　お前はしばらく　（スッ）　龍？」

私は春蘭殿を手で制して季衣の目を見つめると、季衣もまた私の方を見つめ返してくる

季衣の今の気配は朝の気配とは全然違うものだ。　これなら・・・

「季衣、今のお前なら大丈夫だ。　それに今日の百人、明日の万人・・・全てを助けないといけないしな」

「お姉ちゃん・・・」

私がそう告げて微笑むと、季衣の表情が明るくなった。　その様子を見ていた華琳殿は、分かったとばかりに微笑むと口を開いた

「春蘭。　直ぐに出せる部隊はある？」

「は。　当直の隊と、最終確認をさせている隊はまだ残っているはずですが・・・」

「季衣。　それらを率いて、先発隊として直ぐに出発なさい」

「はい！」

華琳殿の命に力強く返事をする季衣。　その表情にも力強い気配を感じた

「それから、補佐として政也を付ける」

「え・・・・・・・・？ お姉ちゃん、が・・・・・・・・？」

「政也にはここ数日無理をさせているから、指揮官は任せたくないの。やれるわね？ 季衣」

「あ・・・・・・・・はい・・・・・・・・お姉ちゃん、よろしく願います」

「ふう・・・・・・・・ああ。よろしく頼むよ、季衣」

私はそう言つと、季衣の頭を撫でていく。季衣はくすぐったそうに目を細めた

「ただし撤退の判断は政也に任せるから、季衣はそれには必ず従うように。直ぐに本体も追いつくわ」

「はっ」

「分かりました！」

こうして、私たちは先発隊として出撃する事になったのだった。さて、サポートをしっかりと頑張りますか・・・・・・・・季衣が動き易いように、ね

その男、独眼龍〜10〜（後書き）

今回は黄巾党の乱の最初のお話でした。季衣の話し相手は政也ではなく、副長（仮）にしました。政也の傍に常にいる副長（仮）だからこそ、季衣とも仲良くなっているという感じです

次回は三羽烏が登場します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6900q/>

真・恋姫†無双～その男、独眼龍～

2011年9月19日01時24分発行